

324

287

禪の真髓



の
真
髓

45.4.26

活

畫

火

火

活

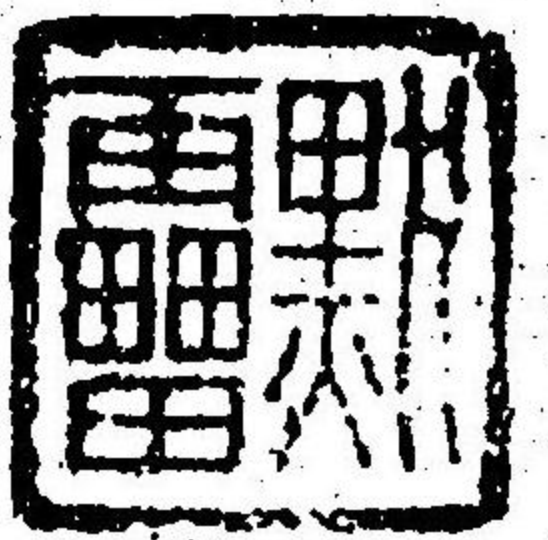


盡

死

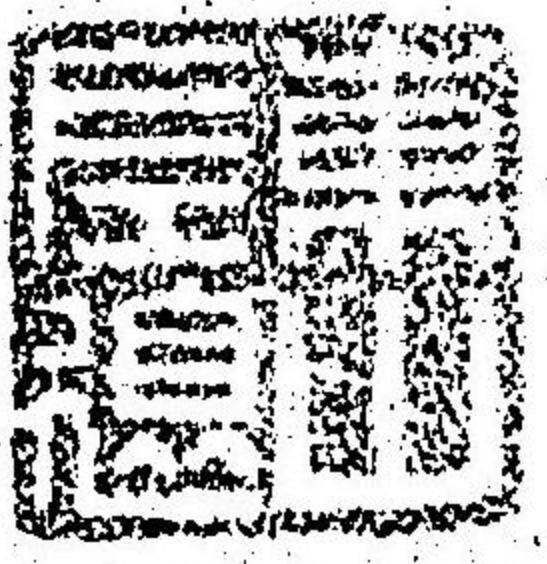
人

東山默齋題心



後人清人清之家

東山黙雷頌



叙

殺人活人活人

是乎殺人か是

是乎活人か是

是乎活人か是

是乎活人か是

活人か是

活人か是

活人か是

活人か是

活人か是

禪の眞髓序

近來禪宗頻に世間に喧傳せらる。其の之を傳ふるもの皆云ふ禪門の一大慶事なりと。然るに予熟、其の實際を觀察するに實に寒心に堪へざるなり。

抑も我が禪門に入らんとする者は、各自分に隨ひ話頭を疑著し、頭燃を救ふが如く、疑來り疑去りて大疑團を打破し、生死の窠窟を跳出して古人の心髓に徴せざる可からず。問ふ何をか話頭と云ふ。曰く公案是なり。中峯和尚山房夜話に曰く

公案は公府の案牘に喩ふるなり。法の在る所にして王道の治亂實に是に係れり。公とは聖賢其の轍を一にして天下其の途を同くするの至理なり。案とは聖賢の理を爲すことを記すの正文なり。凡そ天下を有つ者は未だ嘗て公府なくんばあらず。

公府ある者は未だ嘗て案牘なくんばあらず、蓋し取て以て法と爲して天下の不正を斷ぜん、と欲するものなり。公案行はるゝときは理法用ひ、理法用ひらるゝときは天下正し、天下正しきときは王道治まる。夫れ佛祖の機縁之を目て公案と曰ふ、亦爾り、蓋し一人の臆見にあらず、靈源に會し、妙旨に契ひ、生死を破り、情量を越えて、三世十方百千の開士と同じく稟くるの至理なり。且つ義を以て解す可からず、言を以て傳ふ可からず、文を以て詮す可からず、識を以て度る可からず、塗毒鼓の如くにして聞くもの皆喪す。大火聚の如くにして之に嬰れば則ち燎す。故に靈山之を傳へて別傳と謂ひ、少林之を指して直指と謂ふ。南北宗を分ち五家派を列ねてより以來、諸善知識其の傳ふる所を操り、其の指す所を負て、賓叩き主應じ、牛を得て馬を還へすの頃に於て、麤言細語口に信せて捷出すること迅雷の耳

を掩ふに及ぶ可からざるが如く、庭前栢樹子、麻三斤、乾屎橛の類の如き、畧義路の人の爲めに穿鑿するなし。之に即くときは、銀山鐵壁の透る可からざるが如し。惟明眼の者のみ能く語言文字の表に逆奪す。一唱一和空中の鳥跡、水底の月痕の如く、千途萬轍放肆縱横と雖も皆得て擬議す可からず。遠く鷲嶺の拈華より今日に迫ふまで、又豈に一千七百則に止まるのみならんや。他なし悟心の士の取て以て證據と爲すを待つのみ、實に人の益記持して談柄を資くることを欲せざるなり。世に長老と稱する者は即ち叢林公府の長吏なり。其の燈を編み録を集むる者は即ち其の激揚提唱を記すの案牘なり。古人或は徒を匡すの隙、或は關を掩ふの暇、時に取て以て之を拈し、之を判し、之を頌し、之を別にす、豈に見聞を炫耀し古徳に抗衡して然ることを爲さんや。蓋し痛く大法の將に弊んとするを思ふ、故に

曲げて方便を施し、後昆の智眼を開鑿して其をして共に之を證せしめんと欲するのみ。公と言ふは其の己が解を防ぐ、案とは必ず佛祖と契同せんことを期するなり。然らば公案通ずるときは情識盡く、情識盡くるときは生死空す、生死空するときは則ち佛道治まる。云ふ所の契同とは佛祖大に衆生の自ら生死情妄の域に縛せられて、積劫より今に迨ふまで之を自ら釋くことなきことを哀む。故に無言の中に於て言を顯し、無象の中に象を垂る、其の迷繩既に釋くことを待つ、安ぞ言象として復た議す可きこと有らんや。且つ世の人事有て其の平ぐことを得ざれば必ず理を公府に求む、吏曹則ち案牘を擧げて以て之を平ぐ、學者悟解する所有て自ら決すること能はずして之を師に質せば、則ち公案を擧げて以て之を決するが如し。夫れ公案は即ち情識の昏暗を燭すの慧炬なり。見聞の翳膜を掲

ぐるの金篋なり。生死の命根を斷ずるの利斧なり。聖凡の面目を鑑みるの神鏡なり。祖意之を以て廓明し、佛心之を以て開顯す、其の全超、迥脫、太達、同證の要此に越ゆることなし、所謂公案は惟法を識る者は懼る、苟も其の人に非らずんば詎ぞ其の彷彿を窺ふ可けんや。嗟世の迷妄のもの、其の源を考へずして毎に聰明の資を以て廣く尋ね、博く記し、顯授密傳して、惟言通を務め、心悟を求むるにあらず、棒喝交馳の勝軌をして、情想の稠林に墮せしめ、龍象蹴踏の靈蹤をして、是非の深莽に陥らしむることを致す、愛惜目に溢れ、取捨懷に盈つ、古人醍醐毒藥の喩となし。嗚呼、吏曹の法を竊んで以て天下の賄賂を貸くるが如く、己私一たび勝つときは公道に治平の效あらんことを望まんと欲すとも、其得べけんやと。

方今天下禪學者と稱するもの麻の如く粟の如しと雖も、多くは是賊を認めて子と爲すの漢のみ。是何に依て然るか。曰く邪師の輩、叨りに寵遇を權勢の門に栽えんとし、聲名を世波の底に釣らんと欲し、祖師血滴々の難透難解の秘訣、換骨奪命の大事を取て以て之を賣る。是に於てか其の聲益高くして邪解の徒日に益多し。嗚呼燈火將に滅せんとするや一度其光を熾す、今の禪宗之に類するなき乎。予茲に鑑みる所あり、臨濟録中の小參垂示を譯して聊か其の義を敷衍し、「塗毒鼓」と命名して之を剗闕氏に付す。其の章を設くるが如きは敢て別に意あるにあらず、唯讀者の便に供するのみ。夫れ臨濟録は古來録中の王と稱す、豈に凡見を以て容易に喙を下す可けんや。然るに予禪に參する日尙淺く、且淺學寡聞、轉た慙懼に堪へずと雖も、一片護法の念禁ずる能はず、此の金文を譯す、是畢竟蛇足を添えて識者の笑を招ぐのみ。請ふ讀者

之を諒せよ。

明治四十五年四月上旬

岡本南海識

述者曰く此の書始め題して「塗毒鼓」と云ふ然るに今書肆の請に應して更に「禪の真髓」と題す。

禪の眞髓

目次

第一章	要真正見解	一
第二章	無事是貴人	三一
第三章	隨處作主	四二
第四章	如何是佛魔	五一
第五章	如何是真正見解	六二
第六章	如何是四種無相境	七九
第七章	要自信	八七
第八章	如何是三眼國土	九九
第九章	如何是心々不異處	一一二
第十章	如何是眞佛眞法眞道	一二〇

目次

一

目次

二

第十一章 如何是西來意……………二一〇

第十二章 大通智勝佛……………二二八

第十三章 如何是五無間業……………二二三

禪の眞髓 一名塗毒鼓

岡本南海居士述

第一章 要眞正見解

今時學佛法者且要求眞正見解

今時世間で禪が大に流行して參禪辨道の爲めに江湖を遍歴する者やら又處々で會を設け師を請して接心修行する者やら夥しいことであるが多くは是相似の禪のみで眞正の見解を具する者としては寥々として曉天の星を見るが如くである。禪僧として眞正の見解なくんば眞の禪僧とは云へない。居士として眞正の見解なくんば亦眞の居士とは云へない。我が會裡に來る者は在家出家は擇ばない、朝市山林は論じない、要する所の者は汝が眞正の見解である。諸人

第一章 要眞正見解

若し眞正の見解を識得せんと欲すれば、先づ眞實堅固の志を起し、無字なり、隻手なり、一則の公案を提撕し、前後左右を顧みず、寢食寒暑を忘れて、純一無雜打成一片にし去れ。力を用ふることも久うして一旦忽然として打發すれば、虚空消殞し、鐵山摧け、上片瓦の頭を蓋ふなく、下寸土の足を立するなく、煩惱もなく、菩提もなく、生死もなく、涅槃もなく、一片虚凝にして澄潭の底なきが如く、大虚の痕を絶するに似たる境界に至り、大歡喜を得るのである。學者往々此の田地を認得して以て大事了畢と爲し、以て佛道を成辨すと思へるは、大なる錯である。機位を離れざれば、毒海に墮在すと古人も云つて居る。假令平等無差別の眞智を明了すること有るとも、萬法差別の妙智を煥發すること能はざれば、寂靜無爲空閑の陰處に在つては内外玲瓏了々分明なりと雖も、觀照纔に

若得眞正見
解生死不染
去住自由

動搖騷鬧憎愛差別の塵縁に涉れば半點の氣力はない、故に轉た悟れば轉た參し、差別の關鎖を透過し、宗門の大事を參歇し、最後の奧義を徹了して眞正の見解を識得せなければならぬ。眞正の見解を得れば生死に染まらず去住自由となるのである。さて生死去住が自由となると云つても、生れんと欲すれば何時でも生れ、死せんと欲すれば何時でも死ねると云ふことではない、生に當つて生の道理もなく、死に當つて死の道理もなく、坐せんと要せば則ち坐し、行かんとなせば、則ち行き、活潑々地にして物の爲めに拘束せられない、是を生、死、自由と云ふのである。參禪學道の士は決して一身の爲めに獨り解脱を求めてはならない、既に眞正の見解を得れば各自己の職務の上に之を用ひ、人を利するのが肝要である、就中衲僧家は法窟の爪牙、奪命の神符とも云はれて

居る所の古則公案を以て、十方參玄の衲子を惱害し、釘を抜き楔を奪つて点滴も施すことなく、一箇半箇眞の種草を打出して、以て佛祖の深恩に報答しなければならぬ。浪りに寺門の繁興を好み、強いて學者を招くやうな事をするには及ばない。古人の寺を建て人を聚むるは自ら求めて之を致したのではない。徳を韜み光を晦まして、愚の如く魯の如く、潜行密用して居たのである。所謂麟あれば自然に香しく、道業既に熟すれば其の徳外に發し、之を拒むとも衲子益到り、求めざれども精舎日に興り、殊勝を求めずとも殊勝自ら至つて人にも尊敬せらるゝに至るのである。世間多くは水邊林下寂寞無人の處に於て黙照枯坐したり、或は駁雜にして學を好んだり、或は齋戒を持ち、或は手に珠數を爪繰り口に經陀羅尼を稱へたり、或は奇特奇瑞を現はしたりする者を

不要求殊勝
殊勝自至

殊勝なと云つて居らるゝが、是等の族は終日無爲を行して終日有爲を打し、終日無作を行して終日有作を打して居る。決して殊勝なとは云へない。何が故であるか、眞正の見解なきが故に、却て造業と成り生死輪回の苦を免ることが出来ないのである。

道流祇如自
古先德皆有
出人底路

道流達磨以來の祖師先德は各自人を出す底の方便があつて、各自其の路頭に坐斷して百練千鍛せられたものである。如何なる方便を以て學者を接得せられしかと云へば、達磨は九年面壁して二祖を接得し、石鞏は弓を彎いて三平を接し、秘魔は木叉を擎けて人を驗し、俱胝は天龍一指頭の禪を得て一生受用せられた、無業は生涯莫妄想と云ひ、禾山の打鼓、雪峯の輓毯、趙州の喫茶去、玄沙の蹉過等の如き、是則ち先德が大法器の人を接したる所の方便である。今茲に山僧

要處不受人惑

禪の眞髓

六

が人に指示する所の如きは、只汝等諸人が人惑を受けざらんことを要するのである。今時世間に多くの悪知識が在つて種々の邪法を胡説亂道すれば、學者其の舌頭に瞞着せられて乃ち之を實法と思ひ、逐ふて是に走る、是畢竟野狐に魔魅せられて西東に走るが如くて、皆是人惑を免るゝこと能はざるの致す所である。此の如き人境の惑は云ふ迄もなく佛祖の惑をも受けてはならない。佛を求むるときは佛に迷ひ、法を求むるときは法縛を受くる。若し佛四十九年の説法、祖師一千七百則の公案を把つて至極重寶な者であると思ふたなら、既に佛惑祖惑を蒙つて居るのである。是即ち物の爲めに轉ぜられたと云ふべき者である。己に迷ふて物を逐ふのは宜くない、物を逐ふて却て物の爲めに轉ぜらるゝ者は、下根下劣の漢である。故に巖頭も、物を卻くるを上と爲し

要用使用更莫遲疑

在病不自信處

物を逐ふを下と爲すと云ふて居る。諸人、今此の方が此の如くに説くのを聞いて、信じて用ひんと要せば便ち用ひよ、更に遲疑するには及ばない。若し能く用ひ得用ひ去つて、遲疑の心絶し去れば、是が即ち眞正の見解である。是が即ち殊勝な處である。別に古則公案の數を數へる必要はない。古人は此の眞正の見解を明に識得し、又能く之を受用して疑ふ者もなかつたのであるが、今時の學者眞正の見解を識得することの出來ないのは病什麼處に在るであらう。是は云ふまでもない、只學者に確乎として不拔なる信念なきが爲めである。諸人、若し能く決定の信だにあらば悟れぬと云ふことはあるまい。所以に佛も、信は道の元と功德の母たり一切諸の善法を長養し疑網を斷除し愛流を出で涅槃の無上道を開示すと、又、信は能く智功德を増長し信は能く如來地に到

被他萬境回
換不得自由

禪の眞髓

八

ると説かれて居る。學者若し自ら信ぜずして周章狼狽の體で諸方を遍歴するときには各自其の好む所の目前の萬境に自己の眼を換却せられて自由を得ることが出来ない。自心即ち是佛である。佛と衆生と更に別はない。然るに衆生は相に著して之を外に求むるのである。念を息め慮を忘すれば佛自ら現前することを知らずして、轉た之を求むれば轉た失するのである。是即ち佛をして佛を覓めしめ、心を將て心を捉らへんとするのであつて、曠劫に形を盡すとも終に得ることは出来ない。其の狼狽して馳求する所の心を歇めたなら、即ち釋迦達磨と少しも違ふたことはない。諸人、祖と成り、佛と成り、又祖佛と別ならざる底の者を知らんと欲すや、祖佛と別ならざる者といふて別に外に在るのではない。汝等諸人が即今此の方の面前に於て聽法する底のもの、是即

歇得心々馳
求心便與祖
佛不別

設求得者皆
是文字勝相

ち祖佛と同一體なる者である。人々具足の一心が即ち眞佛眞法であるのに、學人信不及にして卻て之を心外に向つて求むるのである。凡そ外道と云ふも別に在るのではない、只是の如くに内に背き外に求むる者を指して外道と云ふのである。設ひ經論を讀み群書を覽て、佛法を得たなど、云つて高談し、闊論する者が在つても、又傳燈一千七百個の大事に於て、一々了々分明、毫釐も疑はないなど、何の會釋もなく云ひ散し、無明妄想生滅の心行を以て諸方の師家を誹謗し、自家の骨董品の多いのを誇つて居ても、畢竟是文字の勝相を得たのみで、眞の佛法と相去ること千里萬里天地懸隔である。斯く云ふときは、古則公案は文字を離れた者である。と云ふ者も在るであらうが、決して然らずだ。學者の境界が自然に至るのを待たずして、之を口傳し書寫するに至つて

第一章 要眞正見解

九

は、豈に文字と撰ばんや。參禪學道の要は古人の心髓に徹するにある、只古則公案の數を數へるばかりでは何の所詮はない。併し文字は餘の諸相則ち茶湯、生花、圍碁、將棋、絲竹、書畫、骨董の類に比するときは、遙に勝つて居る、則ち貫道の器となる。然るに門より入る者は家珍でない、一々自己の胸襟より流出して蓋天蓋地にし去らなければならぬ。彼の阿難尊者の如きは佛一代の説法を悉く諳んじて居られた人であれど、多聞の上では悟ることが出来なくて、佛滅後、迦葉の門竿倒却の處で漸く悟得せられたのである、所以に古人も「千日智慧を學ばんよりは一日眞實の道を學ぶに如かず」と云ふて居る。終日他の寶を數へて半錢の價値はない。死んだ文字言句に拘泥して徒に光陰を送過せば死に至るも終に他の活祖意を悟り得ることは出来ない。必ず錯つて邪路に

終不得他活
祖意

萬幼千生輪
回三界

走り惡解を生ずることのない様に用心せなければならぬ。諸禪徳、今此の受難き人身を受け、遇難き佛法に遇ひながら、此時善知識に隨ひ、勇猛に精進して佛法を識得せなければ、今に地獄の黒吏に捉去られ、驢胎馬腹の中に抛込まれる。抛込まれたが最後、萬劫千生三界に輪回して浮ぶ瀬はない、牛と成るか、馬となるか、各自己の好む所の境界に徇つて生を受ける、則ち嬌欲を好めば畜生道に、喧嘩を好めば修羅道に、貪欲を好めば餓鬼道と云ふやうな次第である。然らば此三界輪回を如何にしたならば免ることが出来るかと云へば、其は參禪辨道に如くはない。參禪をすれば三界出離の道理が明かになるのである。併し凡そ多くの人は參禪辨道の上で悟を開いたなら、水甕の中から火でも出るか、死人の尻から光明でも射すか、何か奇特玄妙な事でもあるかの様に

思つて居るであらうが、奇特などの決して有るべき者ではない、只是輪回の苦を脱する迄である。若し奇特な事などがあつたなら、其は野狐禪である。

道流約山僧
見處與釋迦
不別

道流、山僧が見處に至ては釋迦、達磨と少しも異なる所はない。總て明眼の衲僧は、見々是釋迦、聞々是彌勒の境界である。孔門の亞聖顔回も、舜何人ぞ我何人ぞと云つて居る。況や祖宗門下大活現成の眼から見るときは、釋迦、達磨のみには限らない、三世の諸佛、歴代の祖師と手を把つて共に行き、眉毛厮結んで、同一眼に見、同一耳に聞く、實に愉快極るのである。今日萬般の用處何が不足な事があるであらうか、人々此の五尺の身體の六根門頭よりは不可思議の光を放つて居る、此の光は照々として宇宙の充塞を盡し、晃々として色空の融混を極め、而して相の観るべきなく、跡の尋ぬべきなく、青

六道神光未
曾問歌

祇是一生無
事人

にあらず、黄にあらず、長にあらず、短にあらず、機に隨ひ應現して雪山、午夜の星となり、或は顯露當陽にして龍潭所滅の燭となり、鑑體虧ることなくして東平打破の鏡となり、照方立せずして毘耶無盡の燈となり、長年體に觸れて體も分つことが出来ない、終朝目に溢れて目も観ることが出来ない、而して十二時中行住坐臥間斷なく萬般の用處を自由自在に達し得て、何一つ不足なことはない。若し能く此の如くに見得徹し去らば、胸中洒落として、何の馳求する事もない、一生無事の貴人と成るのである。無事は貴人と云つても、人々己の職務を抛ち黙照枯坐し、或は悠々閑々茶華を弄し、園碁に耽けり居らば、國は衰へ、民は土灰に苦み、盜賊は頻りに起り、國家は危険に陥る、是等を無事の貴人と云ふのではない。若し斯の如くならば、衆民嗔り恨み必ず云はん、禪は極めて

思つて居るであらうが、奇特などの決して有るべき者ではない、只是輪回の苦を脱する迄である。若し奇特な事などがあつたなら、其は野狐禪である。

道流約山僧
見處與釋迦
不別

道流、山僧が見處に至ては釋迦、達磨と少しも異なる所はない。總て明眼の衲僧は、見々是釋迦、聞々是彌勒の境界である。孔門の亞聖顔回も、舜何人ぞ我何人ぞと云つて居る。況や祖宗門下大活現成の眼から見るときは、釋迦、達磨のみには限らない、三世の諸佛、歴代の祖師と手を把つて共に行き、眉毛厮結んで、同一眼に見、同一耳に聞く、實に愉快極るのである。今日萬般の用處何が不足な事があるであらうか、人々此の五尺の身體の六根門頭よりは不可思議の光を放つて居る、此の光は照々として宇宙の充塞を盡し、晃々として色空の融混を極め、而して相の観るべきなく、跡の尋ぬべきなく、青

六道神光未
曾問歇

祇是一生無
事人

にあらず、黄にあらず、長にあらず、短にあらず、機に隨ひ應現して雪山、午夜の星となり、或は顯露當陽にして龍潭所滅の燭となり、鑑體虧ることなくして東平打破の鏡となり、照方立せずして毘耶無盡の燈となり、長年體に觸れて體も分つことが出来ない、終朝目に溢れて目も観ることが出来ない、而して十二時中行住坐臥間斷なく萬般の用處を自由自在に達し得て、何一つ不足なことはない。若し能く此の如くに見得徹し去らば、胸中洒落として、何の馳求する事もない、一生無事の貴人と成るのである。無事は貴人と云つても、人々己の職務を抛ち黙照枯坐し、或は悠々閑々茶華を弄し、圍碁に耽けり居らば、國は衰へ、民は土灰に苦み、盜賊は頻りに起り、國家は危險に陥る、是等を無事の貴人と云ふのではない。若し斯の如くならば、衆民隕り恨み必ず云はん、禪は極めて

不祥の大兆であると。衲僧家の無事と云ふのは、人々己の職務に安んじて物の爲めに障礙せらるゝことのないのを無事と云ふのである。

諸大徳、今此三界を見るに、朝より暮に至り暮より朝に至る迄、諸事皆煩惱業苦の火宅である。諸の衆生は生老病死、憂悲苦惱の爲めに焼煮せられて居る、亦五欲財利の爲めに種々の苦を受けて居る、又貪着し追求するを以ての故に、現在は衆苦を受け、未來は地獄、畜生、餓鬼の苦を受くる、若し天上に生れ及び人間に在りては、貧窮困苦、愛別離苦、怨憎會苦、是の如き等の種々の苦があつて須臾も安穩快樂なるとはない。然れども衆生は此の火宅の中に没在して、歡喜し遊戯して、覺えず知らず、驚かず怖れず、火來つて身に逼り、苦痛己を切むれども、心厭患せず、出でんと求むる意がない、寔に愚な

三界無安猶如火宅

無常殺鬼一刹那間不棟
貴賤老少

法身佛

とである。此の三界は只暫時の宿で、諸人の久しく逗留して居る處ではない、無常の殺鬼が迎へに來て只瞬間の中に貴賤老少を選ばず、否應なしに引立て行かるゝのである。諸人此の三界に執着して油斷してはならない、油斷して出でざれば必ず燒害せられるのである。汝釋迦、達磨と同じからんことを要せば、但心外に向つて法を求むることを歇めよ、胸中洒落として一物たりとも求むることなき、是便ち釋迦達磨と別ならざる處である。元來人々具足の法身佛は清淨無垢にして一塵一法をも立せず、宇宙に遍滿して居る。汝等各自己屋裏に立返つて眼を著て之を看よ、其の眼力の極まる處、打成一片不起一念の上に於て照々靈々として山河萬衆を照破する底のもの、是便ち清淨の光を發する所の法身佛である。さて根本の上には萬法一に歸すと云ひ、萬物一體と

報身佛
化身佛

も云つて、全く以て差別を現はし隔礙はないのであるが、其の隔礙なき處に於て、却て梅、松、櫻、柳等と名を命じ、實と現はすもの、是便ち汝が屋裏の報身佛である。さて又化身佛に至ては、其の心廣大にして自他彼我の差別は全くない、故に佛も衆聖中の尊世間の父一切衆生皆是我が子と説かれて居る。此の如き境界、即ち是汝が屋裏に住んで居る所の化身佛である。此の法身、報身、化身の三種の身は別に外に在ると思ふて馳求してはならない、汝が即今此の方の面前に於て聽法する底の人、是即ち三種の身を具する底の人である。汝能く自己屋裏に立返つて見たなら、此の三種の功用あることを知ることが出来るであらふ。若し經論家の論する所に據らば、此の法身、報身、化身の三身を以て無上極則とするのであるが、併し山僧が見處に約せば、此の三種の身は只是名言で、

三種身是名言

法性身法性
土明知是光
影

假令ば藥師、觀音など、云つた位の者であつて、皆是義理に依て名けられた者である。決して眞實不虛、獨脫無依の者ではない。獨脫にして眞實不虛の佛といふ者は、諸の名相を離れた者である。此の三種の身は眞實の者ではないと此の方が事新しく云ふ迄もなく、古人も法身を以て得度すべき者には法身を現し報身を以て得度すべき者には報身を現し化身を以て得度すべき者には則ち化身を現して得度すると云はれて居る、皆其の宜しきに應じて各義理を付けて名を命じた迄で、眞實ではない。寂光土と云ふも自己の本體の上から論じたる者で、眞實ではない。皆是名句である。又法性身、法性土と云ふも、正眼の上から見るときは、影の形に隨ふが如くて、眞實ではないと云ふことを明に知ることが出来る。畢竟法性身法性土と云ふやうな者はない。然るに教相家

爾且識取弄
光影底人是
諸佛之本源

に於て之を極則とするのは、影法師を認めて眞形とした程の事である。諸大徳先づ且らく此の光影を弄する底の人を識取せよ、其の光影を弄する底の者が便ち諸佛の本源である、三世の諸佛歴代の祖師も此の光影を弄する底の人が産出したのである。善きも悪きも諸佛の本源である。併し是は明眼の人の分上であつて、不明眼の人は此の如くに意得てはならない。乃ち此の諸佛の本源となる者を識得すれば、山河大地、一切處々皆是自己の家郷となり、安穩の處となるのである。今此の方が此の如くに說法すれども、汝等が四大色身は說法を聞得て了解する者でない、又汝等が脾胃肝膽等の五臟六腑が說法を聞得て了解する者でもない、又虚空が說法を聞得たと云ふこともない。然らば什麼物が說法聽法を了解するのであらうか、此の說法聽法を了解する底の人

這箇解說法
聽法

は、即今目前孤明歴々として更に一箇の形相なき這箇である。是即ち眞の說法聽法を了解する底の者である。此の者は無始劫以前より盡未來際の後まで一箇の形相なくして、而も日夜朝暮目前分明にして藏さんとして藏さるゝ者でもない。古人も物あり天地に先づ形無くして本と寂寥と云つて居る。此の者が便ち眞の佛祖ともなり、又佛祖に名を命ずる所の者である。若し能く此の如く見得徹し信得及し去らば、便ち釋迦、達磨と少しも違ひないのである。只能く二六時中行住坐臥の中に於て此の祖佛と別ならざる底の者を受用することを得ば、飛花落葉を見ても、鴉鳴鵲噪を聞いても、目に觸れ、耳に滿つる所のもの、及び一切諸法一々皆自己に歸して回避する處もなく、何處も彼處も皆本分となり、頭々物々是と現はれるのである。是の如く正妙の本體は天を照

觸目皆是

し地を照し目前に現成すれども、迷人は只漫りに識情を起すが故に、自己の妙智を礙へらるゝ、自己の妙智を礙へらるゝが故に、煩惱妄想が起る、煩惱妄想が起るが故に、金剛の正體を移し去られて種々に思想が變化する、思想が變化するが故に、或は蟲虻ムシともなり、或は驢胎馬腹の中に生れ、三界に輪回して種々の苦を受くるのである。山僧が見處に約せば、此の三界諸境も、一々皆甚深の法門、無量の妙義と開け、悉く廣大解脱の大海と成るのである。道流、此の甚深解脱の心法は、元より無形無相にして而かも能く豎タテに三際を極め、横ヨコに十方に亘つて、左轉右轉球の盤に走るが如く、逍遙自在なる者である。此の十方に通貫する底の者は、人々具足の六根門頭に在つて、歴々分明リキリにして、自由自在を辨ずるのである。咳唾掉臂も、造次顛沛の間にも、這箇の離るゝと云ふことは

ない、頭上漫々脚下漫々である。此の一心の六根門頭に現はれ出る處を區別して云ふて見れば、先づ眼に在つては見ミと云ひ、耳に在つては聞クと云ひ、鼻に在つては香を嗅ニき、口に在つては談論し、手に在つては執捉ツし、足に在つては運奔する。此の如く各別々に分るゝ者である。本是一精明イツキョウメイが別れて六和合ロクワガツと爲るのである。一精明とは一心である。六和合とは六根が各六塵と合する、眼と色と合し、耳と聲と合し、鼻と香と合し、舌と味と合し、身と觸と合し、意と法と合して中間に六識を生じて十八界となる。若し此の十八界空にして無なるとことを了知せば、六和合を束ねて一精明と爲すことが出来る。然るに學道の人多くは唯一精明、六和合の解トを作すことを免るゝことが出来ない、故に六根門頭の事を認得て、眼に色を見ては其の色に著ツし、耳に聲を聞いては其の聲に

山僧與麼說
意在什麼處

著し、此の心が纏縛せられて自由なることを得ない。心元と無心の道理を能く悟れば、見聞覺知の處に隨つて解脱して無礙自在である。山僧が是の如くに說法するのは、是畢竟什麼の爲めであらうか、更に別の意ではない、唯道流、一切馳求の心を歇むること能はずして、古人の文字言句や拈槌、豎拂の境を認著して、徒に日月を送過するが故に、其氣の毒さを思ひ、此の如くに說話するのである。人々具足の心性を、古人の文字言句や拈槌、豎拂の上に向つて求めたとて、得られる者ではない。

坐斷報化佛頭

道流、山僧が見地に於ては、報身、化身の二佛も、共に坐斷して物の數ともしない。如何となれば、彼の二身は只假りに機に隨つて感現した者で在つて、眞實の佛ではない。斯く報化佛頭を坐斷して見れば、残る所の者は便ち法身佛である。教

十地滿心

相家に於ては法身を極則として大切に用ひて居るが、併し此の方の見處に於ては、其の教相家に於て極則とする所の法身佛をも、根本より坐斷して涓滴をも留めない。又十信、十住、十行、十回向と段々昇進して、十地の位に至つて居る滿心の菩薩も、乞食の賤き者の如くに見做し、又十地を透過して等覺、妙覺の位に至つて居る佛も、彼の手械頸械を入れられて不自在極めて居る囚人の如くに見做す。又羅漢果を得たる者も、緣覺乘を帯びたる者も、譬ば廁穢の不淨なる物の如く、菩提涅槃等は繫驢、概の如くに見做す。是決して此の方の惡口雜言ではない。然らば何故に此の如くに皆悉く打却するかと云へば、道流、空却已前より直に今日に至るまで、本有圓成の一佛性がある。此の佛性の眼より見るときは、法、報、化の三身ぢやの、十地滿身の菩薩ぢやの、乃至羅漢、辟支、菩提、涅

等妙二覺
羅漢辟支
菩提涅槃

爲道流不達
三祇劫空所
以有此障礙

槃等は衆生の根器に應じて隨宜教化せられた迄の者で眞實の者ではない。畢竟何の役にも立たぬ者である。然るに汝等此の佛性の本源に迷ひ、一念心の上に於て三祇劫をも空する眼に達しないが爲めに、種々の障礙が有るのである。若し是眞箇正眼を具したる道人ならば、菩提涅槃等に自己の本源を障礙せらるゝことはあるまい。但能く古則公案に參じて、其の縁に隨つて、佛見法見の舊業を消滅するやうに心懸けて行かねばならん。能く舊業を消滅し得たなら、自然と何の煩もなく、其の因縁次第に本分一枚に用ひ爲して、行かんと要せば則ち行き、坐せんと要せば則ち坐し、進退揖讓の上、に於て自由を辨ずるのである。是即ち無始却已前より不生不滅、不垢不淨、不増不減の眞古佛である。是の如き本尊を人々所持して居ながら、更に佛果を願ひ、菩提を求むること

無一念心希
求佛果

若欲作業求
佛是生死
大兆

大徳時光可
惜

が入るであらうか。兎の毛ばかりも希求す可き者はない筈である。何に縁て斯の如くに云ふかとなれば、古人も云はれたことがある。若し作業して佛を求めんと欲せば佛は生死の大兆なりと、寔に驚直な垂誡である。元來人々具足箇々圓成の眞古佛が在つて、當處を離れず歴々分明であるのに、之を差措て斷食したり、護摩を焼いたり、或は誦經禮拜、長坐不臥、一食卯齋、六時行道と、種々の作業をして、外に向つて佛を求めんと欲すれば、是則ち生死輪回の眞唯中である。即今よりも造作をして佛を求めんとするよりは、自己屋裏の天眞佛を識得して、三界輪回を出離するやうに心懸けるのが肝要である。

諸大徳、生死事大、光陰無常迅速である。暫時も油斷してはならない。然るに皆各自己屋裏の天眞佛を自悟自得せずし

て、只惡知識などに隨侍して、禪を學び道を學び、名相言句を認めて佛法とし、佛を求め祖を求め善知識を求めんとして、唱名念佛、誦經、諷呪を是事とし、佛法の大事を文字言句の上に向つて推量せんとするのは、實に慨かほしき次第である。斯の如くにして徒に光陰を過さば、必ず生死岸頭斷末場に臨んで狼狽へなければならん。參禪辨道も生死岸頭に臨んで俄に出来る者でない、既往の諫めざるを悟り來者の追ふ可きを知つたなら、早く初一念を翻して間違つた事をしないうやうに勤めて、精進するがよい。

道流汝祇有一箇父母

道流、汝只一箇の父母がある、併し此の父母は世間一般の父母ではない。何を指して父母と云ふかとなれば、本分を指して父母と云ふのである。又何故に本分を指して父母と云ふかとなれば、人の子を出生するには、是非共父母の縁を借

古人云演若達多失却頭求心歇處即無事

らなければならぬ、其の如く森羅萬象、此本分より出生するに依て父母と云ふのである。此の父母は汝等が尋常求むる所の佛とも成り、又は一代藏經をも演説し、古則話頭をも拈提し、又は地藏、彌勒、藥師、觀音をも産出したる者である。斯かる芽出度父母を人々所持して居ながら、更に什麼物を求むるのであらうか。汝等各自己に返照して看よ、只此の一箇の父母が汝等諸人の屋裏に穩坐して居る。此の父母に相見し得たなら、彼の演若達多と同事で在つたと云ふことが分かる。演若達多の事は楞嚴經にある話であるが、此の人は室羅城中の者で、頗る美男子であつた、或時邪神の廟に參詣して惡夢に襲はれ、其の翌朝立腹しながら鏡に對して自分の顔を映した所が己の眞の顔色が其の儘鏡に映りし故、さて以爲らく我が顔程美しき者は尋常稀であると思ひしに、一

夜の中に斯くも恐ろしき姿に成つたのは、是定めて魑魅の所爲であらう、去るにても我が美しかりし頭は何處へ行つたであらうかと云つて、狂氣の如く彼方此方と己が頭を尋廻つた、折柄人在り汝が頭は依然として元の處にありと云つて鏡を見せたところ、さてはと思つて俄に心嬉しく感じ、完爾と笑ひながら鏡に對へば、己の笑顔鏡に映りて紛れもない元との演若達多に復へつた、其のとき漸く迷の雲晴れて狂走して求むることを歇めたと云ふ、是頭を外より得たのではない、縦ひ求むることを歇めなくとも亦失ひもしない。是は迷悟の二方面に譬へた話で、始め我が頭を失ふたと云つて狂走したのは迷の方、後に人の注意に依て我が頭を得たと云ふて悦ばれたのは悟の方である。彼の演若達多が、始めより失ひもせぬ頭を失なつたと思ひて狂走せしが、

大徳且要平
常莫作模樣

其の求むる心を歇めた所が、身心共に無事に成つた。其の如く學者も元とより自己屋裏に安然として居る一箇の父母が留守であると思つて外に向つて尋求むる、其故に手忙はしく脚亂れて無事の境界に到達することが出来ない。其の求むる心を歇めたなら、即ち無事となる、有心の歇む處が即ち無心で、迷と知りたる處が即ち悟である。根本の上に失ふたと云ふことも得たと云ふこともなく、喜もなく、亦憂もない。畢竟無事である。諸大徳、各無爲無事の田地に到らんと欲せば、分別計較を爲して顛倒迷妄する事のないやうにせなければならん。否らざれば、只何事も造作に度つて無事に事を生じて、心も忙しく、身も亦修らない。明眼の衲僧の上に於ては、平生の所作所爲、著衣喫飯、屙屎送尿、頭々物々、皆是本來の大道と開くが故に、平常心是道である。併し悟もしないで

見神見鬼

著衣喫飯の上に用ひんとした所で、千里萬里天地懸隔する
 のである。さて又茲に一種の物の好悪も分らない賣僧が在
 つて、人に向つて神を見たとか、鬼を見たとか、或は西の鞍馬
 山で見た、東の戸隠山で逢ふたなど、種々の化々しい事を
 云つて居る。又我は雨を降らさんと欲すれば雨を降らすこ
 とも出来る、又晴さんと欲すれば晴すことも出来る、凡そ天
 地間の事は自由自在に法力を以て祈禱するなど、至極奇
 特らしい事を云つて居るが、自ら迷ふのみならず大に他人
 までにも迷惑を懸けるのである。斯の如き怪力亂神を語つ
 て、人を騙して信施を受けて、其て綾羅錦繡を纏ひ、美食珍膳
 に飽いて、徒に日を送て居らば、必ず其の信施が熱鐵丸と成
 る。其の時後悔臍を噛むと雖も及ばない。然るに在家の善男
 善女共が、此の如き狐狸の變化と等しき惡僧共の邪説を殊

熱鐵丸

瞎屢索飯錢
有日在

勝に聽聞して、惑亂顛倒せられ、自己の本心を失却して生涯
 迷人と成つて果すのは、實に氣の毒千萬である。咄、此の瞎屢
 生、是の如き邪解を爲し、非法を説いて在家の男女を誑し、又
 擅信家より布施や供物を受けて、悠悠閑々茶華を弄し、圍碁
 に耽り、酒色に浸たり、恬として漸色ないのであるが、氣の毒
 なことには今に閻魔大王の前に於て、生存中の打飯錢を一
 々勘定せられて、日々夜々呵責の責苦に逢はねばなるまい、
 恐れても怖るべきは信施である。

第二章 無事是貴人

道流、學道の用心と云つて別に仔細はない、前章述ぶるが
 如く只切に眞正の見解を識得するにある。近頃世間に野狐
 の變化したる如き惡知識の輩が麻の如く粟の如く在つて、

道流切要求
取眞正見解
向天下橫行
免被這一般
精魅惑亂

無事是貴人
但莫造作

種々の邪法を説いて浪りに他人を惑亂するが故に、眞箇眞正の見解を識得し、而して能く其を百鍊千鍛して、然る後天下に横行し、到處の知識の善悪や、具眼の者であるか不具眼の者であるかを能く勘辨して、彼の悪知識の輩に惑亂せらるゝことを免れねばならん。浮かりとして居ると忽ち誑されて自己の本心を失却し、盲目となるのである。無事^{ウジ}是貴人^キである、但入らざる造作をしてはならない、善事を修するも是と認むるは造作である、況や非法を修して是と認めて居るのは造作の上の造作である。然らば造作を離れた無事の貴人といふは如何なる人であるかと云へば、只是平常^{ヒツジョウ}著衣喫飯底の人、是即ち無事の貴人である。此の無事の貴人は汝等諸人の屋裏に安坐して居る。然るに其を知らないで外に向つて走り、傍家に求めて無事の貴人に相見せんとし、本分

三世十方佛
祖出來也祇
爲求法

を識得せんとするのは大なる錯である。諸人外に向つて佛を求めんと擬す其の佛と云ふ者は、即今什麼處^{ナニトコロ}に在るか、佛と云ふは、設へば太郎作、權兵衛と人に名を命ずるが如く、只這箇^{コノコト}本分の上より假りに命じた名である。汝還て其の馳求する底の者を知るや、其の馳求する底の者が即ち眞實の佛である。其の外別に佛はない。斯く迄漏逗しても他を知らなければ馳求するも亦大に宜しい。三世の諸佛、歴代の祖師が出て來たのも、唯法を求めんが爲めである。今の參學の道流も亦唯法を求めんが爲めである。兎に角江湖を遍歴して善知識に親近し、刻苦艱難して眞の法を識得するのが肝要である。何が故に斯く勸むるかなれば、未だ天生の釋迦、自然の彌勒はない、皆是行じ難きを能く行じ、忍び難きを能く忍び、辛うじて悟道せられて釋迦、達磨ともなられたのである。孟

子も天將に大任を是の人に降さんとするや必ず先づ心志を苦め其の筋骨を勞し其の體膚を餓やし其の身を空乏にし行ひ其の爲す所に拂亂す心を動し性を忍び其の能くせざる所を會益すと云つて居られる、雪後始て知る松柏の操事難うして方に知る丈夫の心で、秋風肅殺の氣を経なければ春風駘蕩の時節に遭遇することは出来ない。昔人は道を求むるに骨を敲いて髓を出し、血を刺して飢を濟ひ、髮を布いて泥を掩ひ、崖に投じて虎を飼ふたと云ふ、古へ尙ほ此の如し、況や今に於てをやだ。法の爲めには喪身失命を避けず、二十年三十年玉の汗血の涙を流して參禪辨道をせなくては眞に法の淵源に徹底することは出来ない。法は大海の如く轉た入れば轉た深い。然るに今時の學者は大海の底の事は先づ差措て、未だ其の涯際をも測らずして、悟つた、大閑が

得法始了未
得依前輪回
五道

明いたなど、憚る所もなく吹聴して居るが、實に笑止千萬である。苟も佛弟子と成つて佛祖の迹を學ばんとする者は、佛祖の行ぜし如く法を懇ろに修行して、自悟自證せなければならぬ。密參功積み、潛修力充ちて忽然として打發するときは、法は元とより人々具足のもので、今まで外に向つて馳求したのは大なる錯であつたと云ふことを始て了知することが出来る。見性悟道が出来なければ、依然として住慣れし五道の故里に輪回して種々の苦を受けねばならぬ。古人の二十年三十年參禪辨道せられたのも外の事ではない、只是輪回の苦を免れんが爲めである。佛四十九年の說法、祖師一千七百則の公案も、一切衆生の輪回を濟はんが爲めの教化方便である。然るに世間の學者には往々輪回と云ふこととはないなど、云つて居らるゝが、輪回と云ふことがない

ならば、佛の説法も、祖師の參禪も、徒事徒勞である。大事了畢の上、に於て根本輪回と云ふことはない、と知ることが出来る。是を知つて始て輪回を免ることも出来る。是を知らないで云ふのは、鸚鵡の人眞似と同事である。愚痴な者は千年も萬年も遠い事のやうに思ふてあらうが、即今此の五尺の形骸を直に丈六金人と用ひ爲すも、此の方の儘である。

云何是法

問ふ上に説く所の法とは如何なる法を指して言ふや。云く法と云つて別の法ではない、人々具足の心法である。此の心法は元來無相無形にして十方世界に通貫して到らぬ處はない。此の十方に通貫する底の心法は、即今諸人の目前に現用して行かんと要せば則ち行き、坐せんと要せば則ち坐し、著衣喫飯しつゝある。是の如く目前受用して居ながら、諸人信不及にして還て古人の閑名句を認め、文字の中に向つ

認名認句求
意度佛法

て佛法を思量分別で以て求めんとする。故に心法を相距ること千里萬里天地懸隔するのである。文字言句の上に向つて如何に摸索した所で、佛祖の心髓を得ることは到底出来はしない。然るに今時世間の學者などには、參禪辨道もせないて博覽多識を能とし、釋迦、達磨以上の悟を得たやうに意得て居る者が澤山ある。博覽多識で佛法が會得出来るなら、釋迦、達磨、佛々祖々印可證明と云ふことも入らない。彼の名高い棒使ひの徳山も、始は教相家で、教典に於ては餘程の達人で有つた。就中金剛經が大得意で有つた。當時南方では馬祖下の宗風が盛に行はれて即心即佛と説くものだから、徳山之を聞いて憤慨に堪へられない。教中に道ふに因れば、千劫に佛の威儀を學び、萬劫に佛の細行を學び、然る後に成佛すと説かれてある。即心即佛など、其のやうに容易く成佛

の出来るものでない、出て南方に往いて彼の魔子の輩を破り呉れんと、日頃得意の金剛經の疏鈔を擔ひて行脚せられた、初め澧州に到つて路上に一婆子の油糍を賣るを見て、此處で一休するべく、彼の疏鈔を卸して油糍を買つて點心にしやうとした、所が婆云く「載する所の者は是什麼ぞ」、山云く「金剛經の疏鈔」、婆云く「我に一問あり、汝若し答へ得ば油糍を布施して點心と爲さん、若し答へ得ずんば別處に買ひ去れ」、山云く「但問へ」、婆云く「金剛經の中に過去心も不可得、現在心も不可得、未來心も不可得と説かれて在るが上座那箇の心を點せんと欲す」と、婆子に一問せられて流石の徳山、うんともすんとも返答が出来なかつた、遂に婆子の指圖を受けて龍潭和尚に參じ、一夜入室して覺えず深更に迫り、龍潭に注意せられて出掛けると、暗さは暗し、文目も分かぬ眞の闇、履

道流山僧説
法説什麼説
心地法

物も何にも分らないから、却回して其の事を龍潭に告ぐると、潭遂に紙燭を點じて徳山に與へられた、徳山接せんとする途端、龍潭便ち吹滅せられた、是に於て徳山豁然として大悟せられた、翌日龍潭上堂のとき、徳山法堂前に於て火炬を舉起して「諸の玄辨を究むるも一毫を大虚に置くが如く、世の樞機を竭すも一滴を巨壑に投ずるに似たり」と言つて、多年刻苦の餘に成りし金剛經の疏鈔を取つて、忽ち一炬に付し去られた、古人の標榜是の如しだ、文字言句の中に於て佛法を求めた所で到底得られる者でない。

道流、山僧が説法什麼の法をか説く、決して餘談はしない、心地の法を説きつゝあるのである、此の心地の法は、或時は凡に入り、或時は聖に入り、或時は淨土に入り、或時は穢土に入り、或時は眞諦に入り、或時は俗諦に入り、嫌ふ處なく入ら

んと欲する處に入り、出てんと欲する處に出て、一切處々に満々ちて、十方に通貫して居る。此の如く心法は凡に入り、聖に入り、眞に入り、俗に入り、自由を辨ずと雖も、眞俗凡聖我は是凡である、聖である、眞である、俗であると自ら名乗て出た事は未だ曾てない。皆此の心法より一々名を命じて、凡夫ぢやの、聖人ぢやの、浄土ぢやの、穢土ぢやの、眞諦ぢやの、俗諦ぢやの、月よ、花よと一々喚出した者である。眞俗凡聖此の人の爲めに名字を安著することは出来な、道流、此の眞俗凡聖の爲めに名を命ずる所の此の人を把得して便ち用ひたなら、更に眞俗凡聖等の名字に預り著する事はない、之を號して玄旨と云ふのである。山僧が説法は天下の人とは格別である。如何となれば即今文殊普賢の如き大利根伶俐の學者が面前に出て來つて、雨霞の降りかゝる如く四方八面より

眞俗凡聖與
此人安著名
字不得

山僧説法與
天下人別

難問を將來るとも、何程の事もない。假令文殊普賢が直に出現し來つて佛法を問はれても、我早く來風を辨じて少しも口を開かせない。此の老僧は平生眞正の見解に安住して居るが故に、若し文殊普賢より一層超越した所の學人在つて即今目前に出來るとも、一見に便見し、徹骨徹體勘破するのである。何が故に此の如く學者を自由に勘辨するとが出来るかと云へば、此の方が見地は前に云ふ如く一切世間の者と別なるが爲めの故である。如何となれば世間の者は凡を厭ふて聖を忻ひ、根本の處を只管に是と認めて、其處に窟托して居る、乃ち憎愛取捨の念が有る、爲めに自由を辨ずることが出来ないのである。今此の方は凡と云つて厭いもしない、聖と云つて忻ひもしない、固より亦根本の處と云つて取認めて住することもない、内外玲瓏として不取不捨、不去不

内外取凡聖
内不住根本

來、底に徹して洒々落々として、夢聊が疑ふことも謬ることもなく、無爲無事である。元來心法の上には凡と云ひ、聖と云ひ、取捨と云ひ、疑謬と云ひ、内外と云ひ、上下と云ふが如き事はない。一旦豁然として見得徹し去らば、本來無一物と云ふ處を合點することが出来るのであらう。

第三章 隨處作主

道流、元來此の佛法と云ふ者は、功勳には少しも涉らない。故に古人も「超直入如來地」と云つて居らるゝ。唯是平常無事底、是が即ち佛法の根源である。併し無事と云つても石地藏の如くにして居るのが無事と云ふ者ではない。厠屎送尿、著衣喫飯、困し來れば臥す、是即ち本來の大道、無事の境界である。今我斯の如く大機大用の上を以て働けば、愚人は之を

道流佛法無用功處

愚人笑我智乃知焉

隨處作主立處皆眞

見て、無道心と云つて笑ふであらうが、併し智者は乃ち箇中の消息を知つて居るであらう。人々具足の一佛性は平生の所作所爲の上に於て現用すれども、諸人知ること能はずして、只外に向つて之を求め、空しく工夫を費すのである。是の如き流は總て是愚鈍の漢である。故に懶瓚和尚は、外に向つて工夫を作す總に是癡頑の漢と云はれて居る。諸人、人々具足の此の一佛性が隨處に主となれば、萬象森羅、山河大地、頭々物々、皆是自己に歸して眞實ならぬ處はない。而して此の一佛性より萬境を回換することは自由であるが、萬境より此の一佛性を回換することは出来ない。故に此の主人公を能く受用し得たなら、縦ひ無始劫以來如何なる妄習の舊業、如何なる五逆十惡の五無間の罪業ありと雖も、自然と變じて解脱の大海と爲るのである。然るに今時の學者は、邪法

如觸鼻羊逢
著安在口裏

は如何なる者であるやら、正法は如何なる者であるやら、總て御承知ない。此の如き學者を物に喩へて云つて見れば、彼の羊の如くである。羊は目が鈍いに依て悉く物を辨別することが出来ない、故に凡そ鼻に觸るゝ物は何んでも之を食ふと云ふ。丁度其と同じく上の者も、下の者も辨別すること能はず、何れが主人であるやら、何れが客人であるやら、又賓主の相見は如何なる者であるやら、何れが善知識であるやら、何れが惡知識であるやら、一切其の差別も知らない。何故に僧堂に掛錫して居るかと云へば、多くは是證明書の爲め、寺持修業で、眞實法の爲めにする者は殆どない。故に師家の好惡を選ぶよりは、先づ作務の少い、襯金の多い、供養の多い處を選んで掛錫するのである。又居士などは古則公案の安賣する處を逐つて往くのである。實に慨嘆の至りに堪へら

邪心入道關
處即入不得

れない。今時世間に善知識と呼はるゝ人は多く在れど、此の方の眼から見るときは、多くは是惡知識に紛れもない。然るに學者が皆彼の羊の如き學者ばかりであるに依て、師家の好惡を知らず、偏に善知識であると云つて皆隨喜渴仰して居るのである。是の如き學者は邪心にして道に入つたのであるから、靜中を離れ、動境塵務の中に入るときは、平生の所得力は悉く打失し、蜺蝦の水を失へるに等しく、獼猴の林樹を離れたるに似て、半點の氣力なく、些細な事にも動轉し、卑怯未鍊なる働きの多い。従上の祖師方は、拽石搬土、水薪菜蔬、作務普請の鼓を鳴らして専ら動中の得力を求められたのである。何故に動中の工夫を求められたかと云へば、動中の工夫は靜中に勝ること百千億倍である。斯く云へばとて、靜中を捨て、動處を求めよと云ふのではない、只動靜の二境

を覺えず知らぬ程工夫純一なるのが肝要である。三祖大師も一乘に趣かんと欲すれば六塵を惡むこと勿れ」と説かれて居る。是亦六塵を好めと云ふのではない。水鳥の水に入れども翼の濕はざるが如く、平生六塵の上に於て取らず捨てずして、間斷なく正念工夫相續せよとの心である。斯くして得たる力は火裏より咲出でたる蓮花の火氣に逢ふて轉た色香を増すが如く、紅塵堆裏灰頭土面と成つて爲人度生自由自在に行つて行くことが出来るのである。衲僧の受用は閑處も閑ならず、鬧處も鬧ならずと用ひる。彼の邪道を行して奴郎辨ぜず、賓主分たざる者をば、喚んで眞の出家と云ふことが出来るであらうか、眞の出家と云ふことは出來まい、正しく之は眞の俗家の人である。

夫れ眞の出家と云ふ者は、須らく二六時中行住坐臥眞正

正是眞俗家
人

眞出家

の見解に安住して、佛を辨し、魔を辨し、眞を辨し、偽を辨し、凡を辨し、聖を辨別しなければならん。若し能く是の如く辨別することが出来れば、喚んで眞の出家と云へるであらう。古人も、若し自心是佛なりと見る者は鬚髮を剃除せざる白衣たりと雖も、亦是佛若し見性せざれば鬚髮を剃除するも亦是外道なりと云はれて居る。魔佛及び凡聖等を明に辨別するの眼なき者は、衣架飯囊と云ふべき者で、決して眞の出家と云ふことは出来ない。譬へば自分の家を出て隣の家に入りたる程の事で、依然として元との俗家を離るゝことが出来ない。是等の輩を喚んで造業の衆生と云ふのである。今時の僧にも、一度僧形を學んで家は出づれど、未だ曾て出家の修行もしない者もある。是の如き者に限り、見性悟道などは夢にだも知らない、尋常放逸無漸で、動もすれば在家に出入

喚作造業衆
生

して、在家の男女を伴とし、茶菓を喫し、無義の雑話を打して、日を過して居る。是即ち一家を出て、一家に入つた者であつて、本の俗家に立還つたと同事である。是の如きの流は必定三惡道に墮落して、無量の苦を受けねばならん。古人も袈裟下に身を失却す實に苦と爲すと誡められて居る。兎角火に近づく物は燃ゆるの道理で、俗に近づく者は還る基である。魚の棚を猫の窺ふのは、其の魚に望みあるに依つてある。女の席に僧の交はるのは、其の色を愛するに依つてある。醫者へ人の通ふのは、藥に望みあるに依り、知識に人の隨ふのは、道に志あるに依る。何れにしても人々其の心の欲する處に隨去るものである。是を以て見るときは、一度出家と成る者は、初發の志は佛道に望み有つての事であるのに、最初の善心を空ふし、出家の行儀を廢て、俗の所作を學んで造業

鷲王喫乳

の衆生となるのは、残念千萬である。願くは片時も早く出家の道ならぬ事をば止めて、慎んで僧形を嗜み佛法を專一に修行して貫ひたむ。今時世間に一向物の好惡を知らぬ無眼子が在つて、眞の善知識の分上に於ては、佛法を修行する好僧も、魔道を行ずる惡僧も、皆是同一體で差別ない。恰も水乳の合するが如くである。是が殊勝であるなど、云つて居るが、併し之は寔に笑止千萬である。假令水乳合して分ち難しと雖も、鷲王は水を喫せずして乳を喫する。其の如く明眼の衲僧は魔佛を分明に辨別して、夫々に用ひ爲す。譬へば扇子は扇子、茶碗は茶碗と用ひる如く、其の上へて自由を辨ずるのである。是が即ち眞正の道人、明眼の衲僧と云ふべき者である。是が即ち本分の師家と云ふべき者である。何事も只在るべきやうに用ひ爲すのが本意である。大燈國師は眞正

の見解を知つて居る者と知らない者とは袖の振合せにて
も知れる」と云はれて居る。明鏡忽ち臺に臨んで當下に妍醜
を分つが如く世尊は、靈山會上八萬の大衆の中で拈華微笑
て迦葉を知られた。況や學者が一言半句吐出したならば、其
の邪正眞偽の知れないことはない。古語にも「蛇三寸を出し
て其の大小を知り人一言を吐いて其の賢愚を知る」とも有
るではないか。魔を打するのは尋常の人の受用底であれば
言ふ迄もないが眞正の見解を用ひ得たる大活明眼の衲僧
は、佛魔俱に打卻するのである。併し根本の上に於ては佛も、
魔も、有る者でない。其を有る者の如くに意得て憎愛取捨の
念を起すが故に、生死海裏に浮沈し、六道に輪回するのであ
る。浮沈するとか、輪回するとか云へば、今より遠くかけ距た
りたる事のやうに思つて居るであらうが、即今聖と説き、凡

如明眼道流
佛魔俱打

と説き、憎愛の二念を起したなら、便ち生死輪回の眞唯中で
ある。輪回を受くる者と、憎愛を爲す者と、別に二人はない。

第四章 如何是佛魔

魔と云つて別に有る者ではない、汝が一念の疑を生じて
魔とは什麼物ぞ、佛とは什麼物ぞと問ふもの、即ち其れが魔
である。又佛と云つて別に仔細はない、只其の一念の疑を止
めて、而して自己に立返りて萬法は無生なもので、心は幻化
の如きものであると、眼を著て究來り究去り、而して其の本
源に到達し得たなら、更に一塵一法として取るべき者も、捨
つべき者もなく、十方法界何處も、彼處も、清淨ならぬ處はな
い、觸處現成底である。其處が即ち眞の佛である。さて萬法は
即今目前に現れて居る、又一心は古に亘り、今に亘りて不生

如何是佛魔

更無一塵一
法處々清淨
是佛

不滅な者である。然るに幻化の如しと云へば、諸人、不審に思ふであらうが、各自己に返照して看よ、萬法は無生で、心は幻化の如きものであると云ふことが明に分かるであらう。心の幻化の如しと云ふのは、一心は本と湛然寂靜にして不生不滅、不垢不淨、不増不減なる者であるが、其が萬縁萬境に随つて忽ち生じては、忽ち滅する、此處を指して幻化の如しと云つたのである。又萬法無生と云ふのは、萬法は本と榮枯盛衰生滅あれど、我と自ら柳である、櫻である、と名乗り出てし者ではない、皆一心が喚出した者で、一心の方から喚出されぬ先きは、山川草木の名も、佛神三寶の名も無い、其の名の無い先きは、有れども無きが如くである。即ち無生である。設ひ萬法が在るは有るとした所が、萬法に少も答はない、皆此の一心と萬境と縁の繋つて生じたもので、萬法の方から我は

佛與魔是染
淨二境
約山僧見處
無佛無衆生
無古無今

是萬法である、と名乗出てた者ではない。故に三祖大師信心の銘にも、一心生ぜざれば萬法に答なしと云はれて居る、其の生ずる處の一心と縁ずる處の萬法とを二つ俱に截斷して見れば、更に一塵一法もない。這箇便ち二六時中、行住坐臥頭々物々、在々處々に充滿して、而も能く萬境を轉じ去つて清淨潔白なる者である。是即ち本源自性の天真佛である。此の天真佛の上には一點の汚はない、清淨佛である。故に六祖も是を指して、本來無一物、何處惹塵埃と云はれた。佛と魔との境界を云つて見れば、魔は汚染した者で、佛は清淨なる者である。繞路とは思ひながら諸人が佛魔の分を聞かんと欲するが故に、眉毛を惜まざ斯くは喋々と佛魔の境界を説示したのである。併し山僧が見處に約して根本の上より云ふときは、上諸佛の求む可き者もなく、下衆生の度す可き者も

得者便得不
歷時節

なく、古もなく、今もない、其の古もなく、今もなく、佛もなく、衆生もないと、慕向悟得たる這箇元來什麼物であるか、是即ち古に亘り、今に亘り、照々靈々として時節因縁に墮せざる底の者である。這箇の上は決定の志さへあれば、聞聲悟道も見色明心も何の仔細はない、香嚴は撃竹の聲を聞いて悟り、玄沙は杏の花を見て悟徹し、靈雲は桃の花を見て悟り、張學士は蛙鳴を聞いて悟り、又佛在世の時、廣額屠兒は屠刀を放下して千佛一數に入り、慧能大鑑は應無所住而生其心と誦するを聞くに及んで、頓に悟つて第六代の祖となられた、是等は皆時節を歴ずして悟得たのである。時節因縁を歴ざる者の境界を云つて見れば、修するの證するのと云ふこともなく、得と云ふことも、失と云ふこともない、無爲無事なる者である。然るに修證と云ひ、得失と云ふは、皆是色相の上の事で、

設有一法過
此者我説如
夢如化

本分の上には斯様な事はない。只今日の學者は得失是非に拘泥し、根本眞理を徹見する眼がない、故に自己の受用がない、十二時中に使役せられ、生涯客作兒と成つて果すのである。之に反して根本眞理に徹底した者は、十二時中行住坐臥、只是本分に安住して、更に別事の心頭に懸かる者はない、頭々是道、物々全眞と現はれて、到處現成底である。彼の趙州が「十二時辰を使得」と云はれたと同一の境界である。設ひ諸法の中に之より一層勝れた法があると云つても、此の方が眼からは皆是夢幻空花で、眞實の者でない、と看破するから、一句も揚げさす事なくして、悉皆説破するのである。山僧が説く所の佛法は一々皆是にして更に一點も錯る事はない、若し不是と思ふ者あらば、天下の禪僧、或は又釋迦、達磨、文殊、普賢たりと雖も、我が面前に出來つて、試に一問を發せよ。

道流即今日
前孤明歷々
地聽者此
實處々不滯
貫十方三
自在

道流、汝即今日前孤明歷々として此の方が説法を聽聞して居る、這箇什麼物ぞ、這箇便ち人々具足の主人公である。此主人公は行かんと要せば則ち行き、坐せんと要せば則ち坐し、處々滯らず十方に貫通して左轉右轉逍遙自在なる者であるから、茶に逢ふては茶を喫し、飯に逢ふては飯を喫し、月に逢ふては月を見、花に逢ふては花を眺め、或は松吹く風の聲、或は溪川の水の音を聞き、萬境に出入し、能く萬境を差別する、萬境を差別すれども、萬境の爲めに少も纏縛せらるることとはない。斯の如くに萬境の這箇を纏縛することの出来ないのは如何なる道理であるかと云へば、一刹那の間に遍法界に透入するに依て、あるのみならず如何なる者に逢ふても、皆其の上に現して、爲めに説法する。佛に逢ふては佛を説き、祖に逢ふては祖を説き、羅漢に逢ては羅漢を説

一刹那間透
入法界
說佛

光透十方萬
法一如

き、餓鬼に逢ふては餓鬼を説き、其の外一切處々に馳せ向ひ、諸の國土に游履して種々に身を現し、様々に姿を變へて一切衆生を教化するのである。故に古人も、物に應じて形を現す、水中の月の如しと云つて居る。何が故に此の如くに自由を辨じて衆生を濟度することが出来るのであらうか、別に一法として存在するのではない、只此の處々に游履する底の人が此の如く化度利生するのである。此の人こそ便ち一切衆生の教主、一切衆生の父母である。此の者は外には居ない、只汝が一念心の上に不斷離れずに居る。故に能く一念心の落居に眼を著て看よ、此の者は行住坐臥、一切所作の處に随つて日夜應現して、而も能く其の清淨なること日月よりも明に、其の光明は十方に透徹し、萬法一如である。と云ふことが分かる。學者の中に於て若し大乘根器を具したる者あ

れば萬法一如の正體は本來無事であると云ふことを知ることが出来る。然るに今時の學者が此の無事の境界を知ることの出来ないのは如何なる仔細であるかと云へば、其は云ふ迄もない。今時の學者には信心力が足りない。其故念々馳求して彼の演若達多が己の頭の安然として在るにも係らず、頭を失つたと云つて狂走せしが如く、又身は七寶莊嚴の大白牛車に乗つて居ながら劣等なる羊鹿牛車を求むるが如く、終に大休歇の田地に至ることは出来ない。信がなく、ては假令一千七百則の公案を悉く數へ盡したりとも何の役にも立たない。さて無事の田地と云つて圓頓菩薩の位のやうな處かと思つて居る者も在るであらうが、全く以て左様な處ではない。圓頓菩薩の如きも、勿論教相家などは極位すとするかなれど、併し是も大休歇の田地に至り得た無事の

圓頓菩薩

禪宗見解

人とは決して云はれない。如何となれば是等の流も煩惱妄想なき淨土の中に向つて、凡夫は汚染の者であると云つて厭ひ、佛は清淨の者であると云つて忻ふ、即ち取捨染淨の心が絶えて居ないから、依然として三界を出離する事が出来ないのである。是が本來無事の貴人と云ふ者ではない。本來無事の貴人に至ては什麼物も求むる者もなく、嫌ふ底の者もない、取もなく、捨もなく、憎愛もない。我が此の祖宗門下諸佛頂上の宗旨の眼から見るときは、彼の教相家の如くに凡を厭ひ、聖を忻ひ、淨土を求め、穢土を嫌ふやうな取捨染淨の妄心と云ふ者は微塵もない。直に是現今更に時節なして、驀向目前只是這箇と用ひ、什麼の煩しき事もなく、更に什麼の時節を歷ると云ふともない。今迄凡夫て居ても、一旦豁然として直に此の事に契當すれば、釋迦、彌勒と同見、同聞、同得、同

薬病相治

證底の境界に至り得るのである。法の本源に至つては凡聖
 と云ひ、時節と云ふことは更にない。今此の方が斯様に云ふ
 も只病に應じて薬を與ふる程のことで、諸人の病さへ癒え
 たなら、此の方が口角泡を飛ばして法薬を與ふる事も入ら
 ない、病も癒え、薬も除いて無爲無事の境界に到得て見たな
 ら、其處で始て根本の上には迷と云ふことも、悟と云ふこと
 も、説法と云ふことも、聽法と云ふことも、一々皆是筋ないこ
 とで、總て實法でないこと云ふことが合點行くのである。是に
 至つては一言半句として説く可きことも、示す可きことも
 ない。亦一法の人に與ふる者もない、一法の人に受くる者も
 ない。若し此の方が云ふ如くに信得及し、見得徹して、眞正の
 見解を受用し得たなら、是は残る處もない、眞の佛弟子、眞の
 出家と云ふ者である。此の如き出家であれば日に萬兩の黃

若如見得
 是真出家日
 消萬兩黃金

辯似懸河皆
 是造地獄業

金を施物に受け、日に萬兩の黄金を費すとも、罪にも咎にも
 なりはしない。明眼の衲僧は消する底の境界を能く知つて
 居る、故に信施に打たるゝと云ふ事はないが、無眼子の受く
 る施は假令一滴の水と雖も消し難い。故に古人も、信施を受
 くるは箭を受くるが如しと云つて、誠められて居る。道流、今
 時諸方に、老々大々として人の師範と成つて、己れが妄見に
 委せて漫りに學者を印可する悪知識が在る。又彼の悪知識
 共より印可證明などを受け、其を得て結構と思つて、我こそ
 禪を解し、道を解せりと云つて喜んで居る者が多い。是の如
 き漢は自を謾じ、他を漫じ、一生空しく過すのである。よし禪
 を解し、道を解すと云つて人に向つて懸河の如き辯舌を振
 つて如何に巧に説立てゝも、其は只法身邊際の事を説く分
 の事であつて、實際の法身を知らないが故に、其の説出すこ

若是真正學
道人不求世
問過切急要
求真正見解

若達真正見
解圓明始了
畢

とが、皆是地獄の業となる。若し是眞實參玄の上士であれば、諸方の惡知識共の印可をも願はず、亦世間の人の過失をば目にも懸けず、耳をも傾けず、只切急に善知識に随つて眞正の見解を求めんと要せよ。然し今時の學者は、世間の是非曲直を論ずることは平生底の所作として居る。甚しきに至つては己の師家の好惡を揚げ、他人に說與して憚らない因果撥無の下道もある。若し能く眞正の見解を求め得て、一旦豁然として其の淵源に徹底すれば、直に法眼圓明と成つて、其のとき始めて彼の前に邪師の印可を受け、我れ禪を解し、道を解すと云つたり思つたりし事共は、皆悉く間違つて居たと云ふことを合點して、眞に大休歇の田地に至るのであらう。

第五章 如何是眞正見解

如何是眞正
見解

成住壞空

眞正の見解と云つて別にはない、人々具足の一心は凡に入り、聖に入り、染に入り、淨に入り、彌勒樓閣に入り、毘盧遮那法界に入り、出沒自在にして天の天外、地の地外に透入し、十方世界に游履して、而も其の游履する處、一々皆世界國土に成住壞空の體を現して、其の用處一つとして缺くることはない。成住壞空とは四劫のことである。劫は梵語の劫波を略したので、時間と云ふことである。先づ最初此の世界が出来上る間を成劫と云ひ、既に出来上れば暫く現形を存して居る、其れを住劫と云ひ、其れが暫くすると壞れ掛かる、其れを壞劫と云ひ、壞れ畢れば何にも無くなる、其れを空劫と云ふのである。而して又追々と成劫に向つて世界が出来始める、其れから住劫、壞劫、空劫と四劫輪轉して、人間の生老病死の四相の遷流するのと少しも違ひはない。さて成劫の最初は

如何なる有様であるかと云ふに、大空中に一陣の大風起り、光ある雲となり、車軸を流すが如き雨となり、凝りては山となり、國となり、草木生じ、人畜育す、其の間が二十増減の時間を要すると云ふ。二十増減と云ふは、最初に此の世界に生れたる人間の壽命は八萬四千歳で、其れが百年に一歳づゝ減じて、人壽十歳となる、其の減ずる間が滅劫である。又十歳から八萬四千歳まで百年に一歳づゝ増して往く、其の増す間を増劫と云ふのである。此の一増一減を二十回經過するのが即ち二十増減である。斯の如き二十増減の間が成劫で、其れから住劫となる。住劫も亦二十増減を経て壞劫となる。壞劫の間には、大饑饉があるやら、悪疫が流行するやら、兵亂が起るやらして、動物は皆死絶える、而して火災と水災と風災との災で山川草木皆悉く壞滅に歸する、其の空劫も亦二十

増減の時間を経て復た成劫となる。斯の如きは世界國土の上ばかりでなく、一切の上に此の四つは必ず備はつて一つも缺ぐる處はない。例令ば花の如きも、最初蕾みたる處を成と云ひ、其の開けたる處を住と云ひ、其の散る處を壞と云ひ、散りて後に何にも無くなりたる處を空と云ふ。又一心の上にも此の四つは急度現して有る、現して有るなれど畢竟は無い。如何となれば一心上の成住壞空は、國土の四劫とは違つて、色相には現れない、故に無いと云ふのである。然るに有ると云ふのは、假令は月に對し、花に對し、一心が假りに生じて其處に住してあるときは成住で、其の心が收まるときは壞空である。而して成住壞空と云ふは、本分の方より其の名を現はしたるもの故、成住壞空を現すると云つたのである。前に云ふ如く三千世界も一時燒滅する時節が到來するので

佛出于世轉
大法輪卻入
涅槃不見有
去來相貌

ある、其のとき此の本分の外に更に什麼物が殘存するのであらうか、是に於て人々具足の心性は不生不滅、不垢不淨、不增不減にして火に入つても焼けず、水に入つても溺れざる者である、と云ふことを知る事が出来る。さて釋迦牟尼佛が衆生濟度の爲めに、此の娑婆世界に出生せられて、四十九年の間、横説豎説、頓漸秘密、不定半滿と種々無量の法門を説き示されて、さもありつべく見えしが故に、何時までも急度此の世に存へて居ることかと思つて居たれば、却て俱尸羅城クシラ雙林樹の下に於て、滅度を唱へて涅槃に入り給はれた。是も國土の成住壞空と同じこと、亦凡夫の生死と同くして異なる事もない。して見れば眞の佛と仰ぎ奉つて殊勝がる程の事もない。然らば其の本源の天真佛に至つてはどうであらう、去來の相貌が有るであらうか、本源の天真佛に去來の相

求其生死了
不可得

無生法界

華藏世界

貌はない、不去不來、無相無形なる者である。又釋迦牟尼佛の如くに生死が有るであらうか、其の生死の程も亦遂に不可得である。然らば其の本源の天真佛は如何なる者であるかと云へば、其不可得底の者が即ち本源の天真佛である。此の佛は便ち無生法界ムジホフカイに入り、或は又處々の國土に游履して更に其の蹤迹もない。諸人、無生法界とは何處の世界であらうか。又處々の國土とは何れの國であらうか。今此の方の云ふ所は色聲香味觸法界を指して無生法界と云ひ、眼耳鼻舌身意の六根を指して處々の國土と云ふのである。又此の佛は華藏世界に入ることもある。華藏世界とは如何なる世界であらうか、教文の中の華藏世界は種々の義はあれど、此の方の云ふ所は、人々の赤肉團上に一心の假りに住居する處がある、此處を指して華藏世界と云ふのである。教文の事でも

禪僧の受用は格別である。さて人々具足の一心と云ふ者は、或時は聲界に入り、或時は色界に入り、乃至法界に入り、眼界に遊戯したければ眼界に遊戯し、耳門に遊履したければ耳界に遊履し、頭上より脚下に至り、髮毛爪指等の處々に遊履して自由自在なる者である。斯く眼耳鼻舌身等の國土を遊戯し、復た本の住家の赤肉團上蓮華藏界に歸入して、自己本分の眼を豁開して一切諸法の有様を觀ずれば、森羅萬象、山川大地、皆悉く空相にして更に一法として實と認むる物はない。併し世界國土並に五體六根等、慥に眼に見えて生じたる者であるのに、何故に其を無生と云ふかと云へば、一切萬法現に生じて在るが如くなれども、畢竟皆無生である。其の證據には、各方の其の四大色身、其が第一に無生なることを現はし示す所の好標本である。根本空相の中より生じて、目

唯有聽法無
依道人是諸
佛母

前に死に歸す、死に歸して迹は復た本の無生である。此の無生空相にして眞實ならざる者を是と認て、千年も萬年も存へ得べき者と思ふのは大なる錯である。併し諸法空相の中に於て空相ならざる者が唯一つある。其は餘の者ではない、唯此の聽法無依の道人のみである。此の無依の道人が諸の國土の中に在つて、天真獨露にして生死に染まらず、去住自由を得て、而も十方三世の諸佛菩薩、歷代傳燈の祖師先徳の母と成り、森羅萬象草芥人畜等の主と成つて居る。何故に茲に母と云ふかと云へば、元來此の本分には名はない、名が無ければ之を何と名づけても差支ない、故に諸佛菩薩も皆這箇の中より生ずるが故に、人の子を母の生むに比して母と云つたのである。釋迦彌勒と云ふも此の無依の道人より生出て、無依の道人より其の名を得たる者である。若し這箇無依

若悟無依佛亦無得

の道人に一旦忽然として相見し得たならば、決して佛と認むべき者はあるまい。是に於て佛を得たなど云ふ者があれば、其は眞の佛ではない、野狐の變化である。若し此の如く見得徹し、信得及するもの、之を名けて眞正見解の道人、大活眼の衲僧と云ふのである。

祇如十二分教皆是表顯

今時諸方の學者、何れも此の無依の道人、即ち諸佛の母となる者を識得することが出来ない。其故に眞正の見解を了知することが出来ない。如何なる譯であるかと云へば、其は云ふ迄もなく只阿彌陀、藥師等の如き假名（まな）を認めて佛とし、田子作、權兵衛等の俗子を喚んで凡夫とするに因つて、皆斯様な筋ない事に拘泥して、凡聖の名に自己の道眼を障礙せられて、分明に這箇を知ることが出来ないのである。佛の一代時教、五千四十餘卷の經文は、只是這箇の道理を

皆是依倚落在因果

說顯さんが爲めの名字言句であつて、眞實の法ではない。眞正參玄の上士であれば、名字言句を見ること生冤家（なまのあやま）の如くになくしてはならぬ。然るに今時の學者達が、佛祖の言教は皆是表顯の說であると云ふことを知らずして、却て其の名字言句の上に向つて知解情識を逞うし、自己の根源を知らんとするのである。是等の輩を譬へて云つて見れば、彼の藤蔓の如くである、生涯獨立することが出来ないで、生死に浮沈し、三界に輪回して種々の苦を受けねばならぬ。跛（びつぱ）たる者は杖に依り、渡りする者は舟に依る、舟を失ひたる時は溺れ、杖を失ひたる時は倒る。其の如く佛教祖錄など頼に思つて居る者は、何時かは必ず離れる、其の時は闇の夜に提灯を失ひたる如くに、途方に暮れて迷惑せなければならぬ。一切衆生は其の物を頼に思ひ、因果に落在する底の者を知らざるが

沒若欲得生
死去住脫著
自由即今識
取聽法底人

故に、無始より以來直に今日に至るまで、未だ三界の生死を免かるゝことが出來ない。諸人、若し真正見解の道人であれば、生れて此の身に住著するとも、死して此の身を脱却するとも、其の好む處に随つて自由自在なる分がある。其の自由を得たいと思はゞ、即今目前聽法底の人を識取せよ。此の人のこそ生死に染まず、去住自由なる底の者である。他聽法人の有様は本來無面目にして、形相と云ふものは更になく、始もなく、終もない、固より無住處にして、而も能く其の働の活潑自在なるは、譬へば魚の水中に在つて潑刺たるが如くである。此の如くに活潑々地に自由を辨じて、而も能く平生の所作所爲運動の處に應現して何處とて這箇の者の缺くる處はない、其の所作運動の用處は何物ぞと眼を著くれば、祇は無住處である。此の無住處なる者が即今聽法底の人であ

覓著轉遠求
之轉乖號之
爲秘密

る。至近にして見る可からざる者は眉目である。至親にして知る可からざる者は心性である。眉目は見る可からずと雖も鏡に臨むときは則ち之を見る。心性は固に知る可からずと雖も徹悟するときは之を知ることが出来る。苟も徹悟に非ずして心性の蘊奥を知らんと欲せば、是れ鏡を離れて而して眉目を見んと欲するが如くである。然るに學者徒に外に向つて之を求むるが故に、愈々求むれば愈々這箇の者と遠ざかり、愈々背くのである。其の背き遠ざかる底の者、是即ち汝が求むる底の者である。此の者を號して父子不傳の秘密と云ふのである。秘密と云つて隠して秘して居るではない。然らば密意畢竟如何ん。云く汝若し自己の面目を返照せば密は却て汝が邊に在らん。

道流、此の五尺の形骸は夢幻と伴つた程のこととて、實體な

道流汝莫認
子遲夢幻伴
便歸無常中

い者である。此の實體ない者を認めて至極重寶な者であると思ひ、此の身を便りに空しく光陰を過してはならない、只能く決烈勇猛の志を起して專一に己事を究明しなければならん。熟世の有様を観ずれば、人の命の程も老少不定で、二十歳三十歳で死するもあり、亦七十歳八十歳で死するもあり、定まつた事はないなれど、遅かれ早かれ一度は必ず死なねばならん。斯の如く世の中は無常であるから此の身に執著してはならないと云へば、諸人却て解脱を求むるのであらうが、根本の上には解脱と云ふこともない。彼の四祖道信禪師が年四十にして、三祖僧璨禪師の處へ來て禮拜して云はるゝに、願くは和尚慈悲請ふ解脱の法門を與へよと、三祖云く、誰か汝を縛す、信云く、人の縛するなし、三祖云く、何ぞ更に解脱を求めんと云はれた、所が信言下に於て大悟せられ

莫因循逐樂

たと云ふ。諸人身には敝垢衣を纏ひ、肩には大布の袈裟を掛け、折脚鐺内に野菜根を煮て喫して日を過すとも、決して恥づるには及ばない、孔子も士道に志して惡衣惡食を恥づるものは與に議するに足らずと云はれたてないか、衲僧家の肝要とする所は、只善知識を訪尋して、專一に己事を究明するにある。因循として世間の樂を逐ひ、飽食暖衣逸居して日を過す者は、之を緇流と謂ふことは出來ない。古人は之を衣架飯囊と云つて居る。今日の學者には昔の學者の如き純樸の風は見たくも出來ない、只美食珍膳に飽き、綾羅錦繡を纏ひ、贅澤なる道具を集め、立派なる妾宅を構へ、處々方々に種々様々の樂を逐ふて、而して佛祖不傳の妙道を容易に手に入れんとする者が多い。中々以て這箇事が酒を飲んだり、肴を食ふたりする如く甘々と手に入る者ではない。實に口に

喫するものは木屑羹、鐵釘飯、骨に徹するものは熱喝、嗔拳である。凡そ世間の者の樂と思へる事は皆是苦の種である。然るに多くの人は却て之を樂と思つて居て、苦中に樂あり、樂中に苦のあることを知らない、誠に氣の毒千萬である。佛も「樂は是苦の種となることを知らず」と仰せられた、達磨も亦「樂は是苦の根本」と云はれて居る。眞正參玄の上士は、衣食住に頓著するものでない、大燈國師遺誡にも「肩有つて著すと云ふことなく口有つて食はずと云ふことなし」とある。兎角世間の事は善かれ悪かれ事の缺けない者である、絹布の無いときは木綿物もよし、布子の無いときは紙子もよし、紙子の無いときは薦（コト）被（ツ）もよし、薦（コト）の無いときは木の葉も亦よし、南陽の忠國師は木の葉を搔集めて其中に坐つて居た事もある。白米の無いときは麥飯もよし、麥の無いときは菜飯も

光陰可惜

よし、菜の無いときは甘藷の如きも亦苦しくない、懶瓊和尚は牛糞の火を以て芋を煨て喫して居られた。兎角衣食住に頓著なく、只參禪辨道を專一にせなければならん。日月は運行して箭を射るよりも速い、尺璧寶にあらず、分陰是れ惜むべきである。貴重（コト）の光陰を決して徒に過してはならない。梵網經にも「一たび人身を失すれば萬劫にも復らず、壯なる色の停まらざることば奔る馬の如く、人の命の無常なることは山の水より過ぎたり、今日は存ずと雖も亦明けなんまで保ち難し」と説かれて居る。斯の如く此の身は念々無常にして移易つて居る、其の有様は麤なるときは、地水火風の四大に此の身を攻め侵され、又細なるときは生住異滅の四相の爲めに此の心を逼迫せられ、生死に輪回して種々の苦を受くるのである。生住異滅と云ふは、生老病死と云ふこととて、前

生住異滅
火風則被
地水則被

に述べたる成住壞空とも同じ事である。生死にも分段生死と變易生死との二つがある。分段生死と云ふは、凡夫の生死で、變易生死と云ふは佛祖の生死で、是を異生化身とも云ふ。佛菩薩の一念を起して再來するを云ふのである。分段は麤身で、變易は細身である。語を換へて言ふて見れば、色身の變動と、精神の變動との二つである。都べて變動と云ふことは、宇宙萬象の常態で在つて、凡そ形象ある者は皆變動を免かるゝことは出来ない。此の五尺の形體は地水火風の四大性が暫く假りに因縁和合した迄の者で、實際我と確認すべき本體のある譯の者ではない。又色聲香味觸法の六塵が、吾人の眼耳鼻舌身意の六根に映じて、眼に色を見れば白いとか、黒いとか、耳に聲を聞けば笛であるとか、鼓であるとか分る、そこで更に好い色であるから今少しく見たいとか、厭な聲

道流今時且
要識取四種
無相境免被
境擺撲

如何是四種
無相境

であるから聞きたく無いとか云ふ分別が起る、此の分別思量を六識と名けられて居る、此の六識が段々積み重なりて思想の本となる。多くの者は之を認めて自己の本心であると思つて居るけれども、其れは畢竟六塵が六根に縁の繋がつた影響であつて、決して自心と確認すべきものではない。然るに之を妄執するに由つて、六塵の爲めに惑はされ、種々の迷想を起すのである。道流、即今地水火風の四大は、畢竟無相の境であると達觀して、萬境の爲めに纏縛せらるゝ事のないやうにするのが肝要である。

第六章 如何是四種無相境

四種無相の境と云つて別の仔細あるのではない、汝が一念疑惑の心を生ずるは、則ち地大が來て汝が心を礙へたも

東涌西没南
涌北没

のである。又汝が一念愛欲の心を生ずるは、則ち水大が來つて汝が心を溺ぼらしたものである。又汝が嗔恚の心を生ずるは、火大が來て汝が心を燒立てたるものである。火の業であるが故に、怒れば顔面赤くなり、總身發熱し、心も猛烈になる。又汝が一念喜悅の心を生ずるは、風大が來て汝が心を飄したるものである。風の業であるが故に、心も軽く、身も軽くなり、我覺えず横手を拍ち雀躍するのである。若し能く地水火風の四種の境は、元來無相なる物であると、斯様に辨別し、受用し得るならば、四種の境は勿論のこと、百千萬境が一時に出て來ると雖も、少も其の境の爲めに惑亂せらるゝ事はない。却て萬境を轉じ去つて自由に受用することが出来るのである。此の處々に能く境を用ふる底の者は、東涌西没、南涌北没、中涌偏没、偏涌中没、前に在るかとするれば忽焉として

四大如夢如
幻

後に在つて、東西南北、四維上下、出でんと欲する處に出で、入らんと欲する處に入り、水を履むこと地の如く、地を履むこと水の如く、活潑々地に大虛の裡に出没して一箇自由の境界である。如何なる仔細に依て此の如く自由を得るかと云へば、地水火風の四大は、元來如夢如幻にして、一々實體ないものであると云ふ所の根源に徹底して居るに依て、ある。此の根源に徹底し得る底の者は、是什麼物ぞ、能く眼を著けて看よ。世間多くの人は、僅に五六十年の生命しか保たない。此の五尺の色身を認めて、是が我であると思つて居るが故に、四種の境に惑亂せられて種々の障礙が起るのである。併し此の身は、地水火風の四大性が假りに因縁和合した迄のもので、決して我と認むべき物ではない。其れ故此の五尺の身體の中の髮毛、爪齒、皮肉、筋骨、髓腦、垢色と云ふ如き、すべて

堅まつて居る部分は皆之を地に歸し、又唾涕、膿血、津液、涎沫、痰淚、精氣、大小便利と云ふ如き、すべて濕へる部分は皆之を水に歸し、又凡そ體溫の如き煖氣の部分は之を火に歸し、又すべて手足の運轉、五臟六腑の活動等、凡そ動轉に屬する作用は悉く之を風に歸して、地水火風の四大各離散して和合を失ふたなら、最早是が我が身であると云ふべきものは何處に在るであらう、決して我が身と認むべきものはない。只和合の上に暫く假りの相を爲して居る迄のこと、實に幻化と同じ者である。故に明智の者は怙まない。畢竟如夢如幻と觀じたなら、萬事に自由を得て、愚痴も、我慢も、自然と消滅するのである。所以に經にも、一切有爲法、如夢幻泡影、如露亦如電、應如是觀」と説かれてある。道流、汝此の四大如夢如幻に達し得て見れば、即今目前說法聽法底の者は、孤明歷歷とし

道流汝祇今
聽法者不是
汝四大能用
法四大

て、汝が四大に預からずして、而も能く汝が四大を用ひ得、一切の所作所爲を勤め得る者であると云ふことが分る。所謂皮袋一靈、一靈皮袋、身心脫落、脫落身心である。若し能く是の如く四大の上を用ひ得て、行住坐臥更に他の者にあらずと見得するときは、生死去住自由となるのである。

約山僧見處
勿嫌底法

山僧が見處に約せば、横拈倒用、逆行順行、頭々物々、更に一法として嫌ふ底の法はない。嫌ふ底の法なくんば、勿論好む底の法もない。汝等諸人の有様を見るに、何れも皆聖の名に惑はされて、佛程世に殊勝なものはないと思ひ定めて居らるゝが、其の敬仰して殊勝とする阿彌陀、藥師等の如き佛は皆是聖の名である。其の名は本來の面目坊、嫌ふ底の法なき底の者が、一々其れ相應に名を命じたもので、決して其れが眞箇の佛と云ふ者ではない。本源の天真佛と云ふ者は、此の

五尺の活伽藍カガランの内に穩坐して居る。此の本尊は彫刻師の手を借らなくとも、自然と種々の妙相を具足し、様々の神通を現し、而て三世の諸佛、歴代の祖師にも印可證明を與へ、森羅萬象、草芥人畜等に至るまで餘さず漏さず其の名を命じ、特に即今聽法底のもの、之を是眞實の佛と云ふのである。此の佛は運慶又は狩野元信、或は又吳道子、牧溪等の如き人でも摸寫することは出來ない、實に神妙不可思議の靈佛である。牧溪も此の靈佛に繪畫を學び、運慶も此の本尊より聖像の彫刻を傳授せられた。此の眞佛を知らんと欲すれば、喫茶喫飯の上に能く眼を著けて看よ、何日か相見する時節があるであらう。又世間には、五臺山の中に肉身の文殊菩薩が居るから何んでも此山中に往いて、文殊に直に相見したいなどと云ふて居る學者も在るが、是は實に見當違て、是則ち聖を

有一般學人
向五臺山裏
求文殊早錯
了也

普賢

觀音三昧法

愛して既に錯了りたる證據である。五臺山に文殊は居ない。其のやうな愚な事を云つて狼狽へるより、長連床上に脚を伸ばして臥して居た方が遙に勝つて居る。是非文殊に相見したいと思ふなら、眞の文殊を紹介しやう。其の文殊と云ふは汝が即今目前の用處、著衣喫飯、屙屎送尿、二六時中行住坐臥、始終異らず、處々全眞なるもの、是即ち眞の活文殊である。文殊を懐かしく思ふ心あらば、云ふ迄もなく、亦肉身の普賢菩薩や、觀音菩薩にも相見したのであらうから序に紹介しやう。普賢と云ふは、汝が一念心上に於て佛も、衆生も、平等にして更に差別ないと見た處が、即ち眞の普賢である。觀音と云ふも別に外にはない、汝が一念心が、見聞覺知の處に於て一塵一法の惑を受けず、身心脱落して淨躰ジヨウタイ々赤洒セキサ々たる底、是即ち觀音三昧の法である。縦ひ文殊、普賢、觀音と雖も、此

の色相を受けて世に出現する上は皆同事、本分と色相とが互に主伴と成つて出て来たのである。又強ち文殊、普賢、觀音に限つたことはない、何人たりとも此色身を受得て世の中に出て來るときは、本分と色相とか互に主伴と成て出て來るのである。今日の動作の上にも亦同事である。設へば一杯の茶を飲むにも、一椀の飯を喫するにも、主人公に此の身が隨從しなければ飲むことも、喫することも出來ない。此身が如何に働きたく思つても、主人公を召連れて出なければ、働くことも出來ない。本分と色相と互に主伴とならなければ、自由は利かないのである。一即ち三、三即ち一である。一とは一心、三とは文殊、普賢、觀音の三尊、此の三尊と云ふも皆是一心の上より出て來たものであるに依て、一即ち三である。即ち身心不二の謂である。又文殊、普賢、觀音も、落居は一心に歸

一即三即

する者であるから、三即ち一である。即ち萬法一に歸するの謂である。若し能く斯様に意得たなら、看經看教しても差支ない、決して聖名文句に礙へらることはありはすまい。

第七章 要自信

今時參禪學道の人を見るに、凡て確乎たる信心力が無い。信念なくして如何に佛祖不傳の妙道を知らんとした所で到底知ることには出來ない。兎角參禪學道の輩は自信と云ふことが最必要である。決して外に向つて佛を求め、祖を求め、法を求め、道を求めるやうな事をしてはならない。凡そ總ての學者が、佛祖の言教を閑事と看る眼なくして、却て他の言句を認めて至極大切なるものであるとのみ思ひ、其が爲めに自己の眼を換却せられて、都て物の善惡邪正を辨別する

如今學道人
且要自信

ことが出来なく成つて居る。實に氣の毒千萬である。さらばと云つて、文字を離れて參禪辨道の爲めとしては、曾て善知識の門を潜ぐる者もない、是非もなき次第である。何んとなれば善知識の處には、殊勝氣な事や、奇特らしい事は少もない。朝には熱喝、夕には嗔拳、故に後學初機の者は湊泊するに難義である。さて汝等が尋常求むる所の祖と云ひ、佛と云ふは、皆是佛教、祖録中の言句葛藤である。古人の糟粕である。決して是が眞實の祖と云ひ、佛と云ふ者ではない。眞實の佛祖を知らんと欲せば、各自己に返照して見るがよい。古人の糟粕ばかり嘗めて居ては、すは鎌倉と云ふときに何の役にも立たぬ。偶大明眼の衲僧が在つて、「大死底人還活如何」とか、或は「生死到來如何排遣」とか云ふ如き向上の一句子を拈提し、或は機關の中より出て來て其の境界を働くときは、如何に酬

祇如有祖有
佛皆是教迹
中事

大丈夫兒莫
祇廢論主論
賊中客
論說閑話過
日

對するであらうか。前の間に對して「投子は、不許夜行投明須到」と答へられた。後の間に對して「雲門は、在什麼處」と答へられた。即今諸人作麼生か答へ得る。天下の學者平生古人の糟粕ばかり嘗めて居るものだから、是の如き向上の一句子を他に問著せらるれば、忽ち行き詰まりて種々の疑念を起し、天地の間を阿方彼方と尋問して日を過すのである。苟も大丈夫兒たる者の耻つべき事ではないか。身は専門の道場に在りながら骨折ることもしないで居て、己の仕へて居る主人の噂をしたり、或は盜賊や強盜などの物語をしたり、或は世間の是非得失を論じたり、或は他人の容貌や、衣食住の好惡を批評したり、或は他人の財産の有無を論じたり、何の役にも立たぬ閑事の雑話を打して、貴重なる光陰を決して空しく送てはならない。近頃別して此の如き無道心なる者が

山僧此間不
論僧俗

澤山あるのは、實に慨かはしき次第である。特に禪門は黙に
宜しく、喧に宜しからずと云つて、餘計な口を利くことを忌
むのである。況や非法の雑話を打して空しく日を過すに於
てをやだ。我が會裡に來る者は僧俗は論じない。併し何人た
りと雖も此の方の面前へ出て來るときは、一見便見直に其
の者の眞物であるか、偽物であるか、善人であるか、悪人であ
るかを、底に徹して悉く識得するのである。此の來者を識得
する底の向上の那一人の境界から看るときは、假令學者が
如何なる手段を用ひるとも、如何なる事を問ひ將ち來ると
も、只是れ聲名文句のみで、畢竟夢幻の如き何の役にも立た
ない事である。此の如く文字言句に泥み、是非善惡に涉つて、
兎や角と問ひ將ち來る事共は、一々以て眞實の法と云ふ者
てはない。却て目前の境に乘し來つて口を開く底の人を看

但有聲名文
句皆是夢幻

若有人出來
問我求佛我
出即應清淨境

るに、是即ち祖師の心印、諸佛の玄旨である。さて諸人、佛は人
天の大導師である故、世間の事は一切生れながらにして知
つて居る、殊勝なる者であると思つて居るであらうが、して
見れば最初より我は是佛であると云つて自ら名乗て出づ
ることもあるらうのに、終に自ら我は是佛と云つて名乗て出
られたこともない。却て這箇無依の道人が、活脱自在に境に
乘じて出て來て、一々其の名を命じたものである。若し學人
在り此の方の面前に出て來つて如何なるか、是佛と問へば、
我即ち清淨の境に應じて即ち佛身を現して接得する。佛身
を現すると云つて、此身を金色に變じ種々の奇特奇瑞を現
はすのではない。此の方の佛身を現すると云ふは、此の色相
を其儘に、諸縁を放下して、自己の曾裡洒々落々と成つて一
塵一法を立せざる處を指して云ふのである。此の身は元來

草囊屎塊子で、不淨極まる者である。併しながら、不淨なる者である。怙む可からざる者である。愚痴蒙昧の輩は、不淨なる者である。佛身と變ずるのである。愚痴蒙昧の輩は、不淨なる者である。怙む可からざる者であると思はないで、卻て之を清淨無垢の者である。至極結構なる者であると思つて、此の身に執著するが故に、元來不淨なる者の臭穢充滿して居るものが暴露して、益、愚痴に陥るのである。或は又人在つて此の方に菩薩を問へば、我即ち慈悲の境に應じて出て接得するのである。慈悲が即ち菩薩で、慈悲の外に菩薩はない。或は又人在つて我に菩提を問へば、即ち清淨微妙の境に應じて答へ。或は又涅槃を問へば、即ち寂靜無爲の境に應じて答ふるのである。假令諸方から問ひ將ち來る所の境は千差萬別であつても、其の機に應じて答ふる者は、始終異ることもなく只無依

有人問我菩薩我即應慈悲境出

境即萬般差別人即不別

の道人のみである。古人は、物に應じて形を現す水中の月の如し」と云はれて居るが、實に其の如く這箇無依の道人は、萬物の上に應現して其の妙用を現はすこと、恰も月の萬水に沈むが如くである。

道流汝若欲得如法直須是大丈夫兒始得

道流、汝若し佛祖の妙道を識得し、見地明白なることを得んと欲せば、只須らく大丈夫兒にして始て得べしだ。故に達磨大師曰く、「諸佛の妙道は曠劫に精勤して行し難きを能く行し忍ぶ可からざるを而も忍ぶ豈に小徳小智輕心慢心を以て眞乘を冀んと欲せば是の處は有り有ることなし」と、又李和文都尉の偈にも「學道須是鐵漢、著手心頭便判直赴無上菩提」一切是非莫管」と云はれて居る。兎角大丈夫の鐵心漢にあらざれば、此の無上の妙道を識得することは出來ない。若し萎々諾々として世間の風潮に隨ひ、萬境に心を回換せられ、

夫如甕腹之
器不堪貯醞

随々として聲名文句に随去つて、自己の決定心もないと云ふ風情であらば、到底此の道を知ることには出来ない。如何に醞醞の上味と雖も、甕腹の如き脆き器に盛つては、何の詮もないが、百鍊千鍛の功を経た、黄金の器に盛るときは、自然と醞醞の醞醞たる所が顯はるゝ。其の如く小根劣器の者は、正法を盛る器と成る資格はない。大丈夫兒の大法器にあらざれば、佛祖不傳の妙道を傳へる事は出来ないのである。若し誤て傳ふるときは、法の威光は全く地に墜ちる。然るに今時の師家には、名譽があるとか、地位があるとか、財産があるとか云ふ居士や、大姉には、猥りに印可をする者がある。故に惜む可し千鈞の大法も風にも木の葉の散るよりも尙軽く成り果て、佛祖の威光を地に墜し、世間の學者より爪弾きせらるゝのである。是は皆正法を入れる所の器を見るの明を缺く

隨處作主立
處皆眞

に依てゝある。故に師家たる者は、能く學者の器を見るのが肝要である。併し僅に憎愛の念があるとか、財欲があるとか、名聞根性があつたなら、其が爲めに自己の明を礙へられて、學者の眞偽を勘辨することが出来ない。さて又大丈夫兒の大法器とも成つて、法幢を建て、宗旨を立せんと欲する者は、決して人の爲めに惑亂せらるゝ様なことではならない。人惑を受くるのは別の仔細あるではない、只隨處に主人公と成ることが出来ない故である。若し隨處に主人公と成り得ることが出来たならば、何處も彼處も眞實ならぬ處はない。古も今も諸境の惑を受くるものは、生涯客作の漢と成つて果すのである。自己本分の田地に安住し、隨處に主と成つて、無心の境界に安住して居りさへすれば、萬般の邪境が頭を競ふて出て來るとも、決して他に惑亂せらるゝことはない。故

汝一念疑即
魔入心

に龐居士も、但自ら心を萬物に無にすれば何ぞ妨げん萬物の常に圍繞することをと云はれて居る。若し一念の疑惑が生じたなら、既に是惡魔が心内に侵入したのであるから用心せなければならぬ。惡魔と云つて別に外から來るのではない、一念の疑が即ち魔である。壁隙風動き、心隙魔侵すと云つて、正念相續僅に油斷があつたなら、種々の煩惱妄想が起つて、遂には自己の本心を失却し、様々の間違を生ずるのである。縦ひ菩薩地の人たりと雖も、僅に疑念あれば、即ち生死の魔が大に便宜を得るが故に、只能く外諸縁を息め、内心喘くことなく、心障壁の如くにして、道に入るべしだ。決して外に向つて佛を求め、祖を求めてはならない。然るに迷人は皆外に向つて之を求むるのである。故に古人も、諸佛心頭に在り迷人は外に向つて求む内に無價の寶を懷いて一生休

物來即照

汝一念心生
三界隨緣被
境分爲六塵

することを識らずと云はれて居る。若し外より物來らば即ち其を照破し去り、照破し來りて、而して後に自己に返照するときは、元來佛も祖師も自己屋裏に在つて、却て之を外に求めたのは錯りであつたと云ふことが知れる。汝但即今目前に擧足下足、聞見覺知する底の者を信ぜよ。是即ち萬法を照破して、物と拘らず脱體現成底の者である。若し是の如くに能く信得及し、見得徹せば、更に一事の心頭に懸かる者もあるまい。所謂智劍出て來つて無一物である。一心既に無なれば如何に萬物に圍繞せられて居ても、何の妨もない。併しながら、汝が一念の妄心が境に隨つて生ずる故に、念々相續して、色聲香味觸法の六塵となり、其の六塵の中、自己の好む所の縁に従つて三界に輪回して、生死に浮沈するのである。所謂心有るが故に曠劫凡夫に滯るのである。若し能く這箇

を受用し得るならば、六塵は六和合と成つて更に厭ふ可き者はない。汝即今境に分れて六塵となる底の者を知らんと欲すれば、只日用應縁の處に眼を著けて看よ。行かんと要せば則ち行き、坐せんと要せば則ち坐し、茶に逢ふては茶を飲み、飯に逢ふては飯を喫し、手に在つては執捉し、足に在つては運奔して何等の不足な事はない、應用自在なる者である。故に一刹那の間に淨土に入り、穢土に入り、彌勒樓閣に入り、三眼國土に入り、及び處々に游履して天の天外、地の地外にまで通貫して居る。此の如くに游履する底のもの、是實に不可思議なる者であると、自己に返照するとき、唯空名のみ在つて、什麼の蹤跡もない。此の空名なるもの、即ち處々游履する底の者である。

一刹那間便
入淨入穢

第八章 如何是三眼國土

如何是三眼
國土

三眼國土とは、或は三目國土とも云ひ、或は三身國土とも云ひ、又華嚴合論には法眼、智眼、慧眼之を三眼と云つて居る、併し山僧は法、報、化の三身を指して三眼と云ふのである。國土と云ふも、別に國のあるてはない、只三眼を以て學者の機に應じて教化せられたるまでである。若し人在つて身心寂靜、無爲安穩の田地に到り得んと欲する者があれば、我即ち清淨法身佛の中より出て、直に本分の事を以て説示するのである。又人在つて一味平等の法を以て得度せんと欲する者あれば、我即ち報身佛の中より出て、直に現成底を以て説示するのである。現成の上に於ては佛祖も凡夫も平等無差別である。如何となれば富貴の人の目にも、貧賤の人の目にも、

法身佛

報身佛

化身佛

釋迦の目にも、達磨の目にも、柳は緑に、花は紅と見へ、鳥はカ
 ア〜雀はチウ〜と聞えるであらう。又人在つて色相の
 上の事を以て得度すべき者あれば、此の五尺の色身、即ち自
 己妙用の化身佛であると説示するのである。如何となれば、
 自己本來の面目坊が化現して手に舞ひ、足に踏み、眼に見、耳
 に聞く、故に此の色身を化身佛と云ふのである。根本の上よ
 り見るときは、此の法報化の三身と云ふも、皆是隨宜假りに
 命じた名であるから必ず轉變を免かることは出来ない。故
 に決して此の三身を眞實の者であると思つて執著しては
 ならない、教相家に於ては、勿論法身を以て根本とし、報化の
 二身を用となして居るが、此の方の見處は全くさうではな
 い、法身は説法を了解すると云ふことは出来ない。所以に古
 人も、身は義に依て立し土は體に據て論ずと云はれて居る。

古人云身依
義立土據體
論

法性は本と無相であるに依て見ることは出来ない者であ
 れども、此の色身の上に出て来て働くが故に、其の妙用を知
 ることが出来る。如何にして知らるゝかと云へば、手に在つ
 ては執捉し、足に在つては運奔し、鼻に在つては香を嗅ぎ、口
 に在つては談論する、是即ち法性より其の妙用の現はるゝ
 處で、是の妙用に義理を立てゝ名を命じた者である。又土地
 と云ふ者は能く萬物を發育するものである。其の如く法性
 は、能く菩提の種子を發育するに依て、此の理に基いて只假
 りに命じた名である。是を以て見るときは、法性身と云ひ、法
 性土と云ふは、皆是建立の法、依通の國土にして、眞實の者で
 はないと云ふことが明に知れてある。三身と云ひ、國土と云
 つて名字を建立するのは、只當分學者の機に應じて、止むこ
 とを得ず横説豎説せられた迄である。若し之を認めて眞實

空拳黃葉用
誑小兒

と思つたなら、則ち彼の嬰兒の啼くとき父母則ち空拳を握りて饅頭と云ひ、或は黃葉を揚げて黄金と稱すれば、嬰兒之を見て眞の饅頭と想ひ、眞の黄金であると思つて、即ち啼くことを止むると同事である。佛一代四十九年の説法は、即ち月を標す指である。然るに愚鈍な者は之を眞實の法であると思ひ、或は祖師一千七百則の公案を至極の重寶であると思ひ、文字葛藤の上に向つて眞佛眞法を求めんとするのである。其れは譬へて云つて見れば、痰藜菱刺や、或は又枯骨の髑髏を刺して膿液を求むると同事である。痰藜菱刺や枯骨の髑髏を、如何程絞つて見た所で、汁の出るべき筈はない、死んだ文字言句の上を如何に詮索して見た所で、佛の出て來る筈はない。眞佛眞法と云ふ者は、人々具足の一心より外にあるべき者でない。然るに之を外にして尋覓むるのは、實

心外無法内
亦不可得

に愚の至りである。斯く云ふときは、眞佛眞法は内にあるであらうかと、還て之を内に向つて尋覓むる者もあるであらうが、内も亦不可得である。故に大慧も、此の心内外中間に在らず實に方處なしと云はれて居る。此の如く内外中間共に放却したならば、什麼處に向つて什麼物を求めんとするのであらうか、求むる者としては更に有りはすまい。

汝諸方言道
有修有證

諸人、今時諸方に善知識と呼はるゝ人の、人に對する説法を聞けば、大道に入得するには、四十二位ぢやの、五十二ぢやの、又機關、法身、言宣難透、五位、十重禁戒ぢやのと云ふ修行の階級が在つて、其の階級を段々と經て、而して後に此の事を悟徹する事が出來ると云つて居る。根本の上に修するの、證するのと云ふ事のあるべき筈はない。此の如き惡知識の教化に逢ふて、決して自己を錯つてはならない。斯る惡知識の

汝言六度萬
行齊修我見
皆是造業

中に於て假りに此の道を修し得たと云ふ者が在つても、其れは皆是生死の業因で、眞實の大道と云ふ者ではない。衲僧家に於ては、生死なしと見るも既に生死の業となるのである。又六道萬行を一々修し得た者に非らざれば成佛するとは出来ないと云つて見たり、或は又我こそ六度萬行を齊しく修し得たなどと云ふ者があつても、此の方の眼より見るときは、皆是名句に惑亂せられ生死の業を造りたる迄のこととて、一として眞實の者ではない。又世間多くの者は、何れも皆佛程世に殊勝な者はない、法程尊い者はない、菩薩程慈悲深い者はない、身口意の三業を治むるには看經看教ケンキョウケンキョウに如く者はないなど、云つて、偏に殊勝邊に落在して居るのであるが、總て是造業である。看經看教は須らく看經看教の眼を具すべしだ。然るに世間多くの者の看經看教するのは成

佛與祖師是
無事人

佛作祖を求めんとするか、或は福德智慧を願ふより外はない。何れにしても、向ふに物を立て、其を願つて勤めを爲すのは、是既に顛倒して居る。故に看經看教も亦是造業となるのである。遊行派の元祖一遍上人の歌に「極樂に行かんと思ふ心こそ地獄に墮つる始めなりけり」と云ふのがある。諸人戒律を持ちたり、誦經したり、直饒チキョウ恁麼ニンマにして佛を求め、祖を求むると雖も、佛や、祖師は、汝等が失せたる物を尋ぬるが如く、七顛八倒して阿方彼方と忙はしく世間を経歴する者ではない、當軒大坐して無爲無事で在る。此の無事の人、即今什麼處ナニトコロに奈何なる相をして居るかと云へば、此の方が餘さず、漏さず、皆是造業と打却した、此の者が即ち無事の人である。又汝等が求心歇む處、即ちは無事の人である、佛である、祖師である、此の外に佛と云ひ、祖師と云ふ者はない。又一切世

有一般膳禿
子飽喫飯了
便坐禪觀行

厭喧求靜是
外道法

間の法は不浄な者であると云つて見捨て、出世間の法は清浄の法であると思つて認著し、只管寂静の境に安住して居る者もあるが、根本の眼から見るときは、便ち清浄の業となる。善悪浄穢共に著するは、皆是業因となるのである。

又茲に一種の盲僧がある。此の盲僧坐禪觀法するのは宜しいが、心源湛々たる處を佛道であると意得、念漏を把捉して起らないやりにして見たり、或は塵務繁絮にして參禪が出来ないだの、世事繽紛として工夫の妨げになるなど云つて、都會の鬧熱を避け、水邊林下寂寞無人の處を求め、飯をたらふく打食つては黙照枯坐して居る。是則ち佛法を破滅する所の外道と云ふべきである。衲僧家に於ては行も亦禪坐も亦禪、語黙動靜體安然である。又根本の上には喧と云ふこともなければ、靜と云ふこともない、是に於て心を靜むる

の、念を修むるのと云ふ沙汰はない。所以に達磨も、此の心を鎮めて寂靜にして居ることを肝要と思ひ、或は心を外に放つて物を料簡して求むるを肝要と思ひ、或は又此の心を澄まして外へ散さぬやうなことを肝要と思ひ、或は又無念無想無知無覺に成つて身動もせず恰も枯木瓦石の如くにして居るのを肝要と思ふたりする斯様な輩は、皆是造作に度つて正意を失つた者である」と云はれて居る。今時は如き輩が大に世間に流行して居るが、眞の佛法と相距ること千里萬里である。故に古徳もこの事は「有心を以ても求む可からず無心を以ても得可からず言語を以ても造る可からず寂黙を以ても通す可からず」と云はれて居る。諸人、即今先づ是の如くに説法聽法する底の人、此の人をば如何に修證し、如何に莊嚴せんとするか、如何程莊嚴し、修證せんとした

所で、元來此の聽法底の人は修證することも、莊嚴することも出来ない者である。然るに此の聽法底の人より他を莊嚴せんと欲すれば、森羅萬象、山河大地、六凡四聖、總てのもの悉く莊嚴し得ることが出来る。上來説くが如く、他の本分を捉へて修證するぢやの、莊嚴するぢやのと云つて見たり、又心を靜めたがよいの、無心にして禪定に入つたがよいなど、云つて、錯て學者に示してはならない。併し道流、此の惡知識元來根本の事は夢にだも知らないが、學識が有つて、辯才が有る、其故文字言句の上に向つて知見解會を逞うし、己が辯舌利口に任せて勝手な事を説散して殊勝氣な顔をして居る。然るに無眼子の學者共之を聞いて、其の舌頭に瞞着せられて、是が眞實の佛法である、是こそ眞の善知識である、近頃奇特な人である、我等如き凡夫の到底測知る所でないなど

道流汝取這
一般老師口
裏語爲是眞
道是善知識
不思識

冷噤々地如
凍凌上驢駒
相似

云つて隨喜渴仰して居る。瞎屢生、汝一雙無事の眼玉を持ちながら、自己の鼻先に垂下つて居る這箇を見逃して、其のやうな邪魔外道の見解を爲して、此の貴重なる光陰を空しく送つては第一自己の眼玉に對して申譯もあるまい。此の如き學者共の風情を見れば、偶人天衆前に於て一言半句吐出すことが、恰も三冬嚴寒の時に凍えたる人の自由に言語を發することの出来ないが如く、又彼の氷を渡る驢馬の戦々競々として歩を進むること能はざるが如く、世間の毀譽褒貶を恐れ、世間に媚び諂つて卑怯未練なる體裁を現はして居る。而して云ふやうには、我等如き分際として猥りに善知識の上を彼是是非するときは、法罰立處に至るであらう、口業を謹まねばならぬなど、云つて居るが、彼の邪法を説いて人を錯まる如き惡知識などは、思ふ存分毀つて呉れた

道流夫大善
知識始敢毀
佛毀祖

がよい。決して口業を生ずることを怕るゝには及ばない。毀るばかりでは、一棒に打殺して狗子に與へて喫卻せしめたなら、佛祖に對する奉公となるのである。道流、夫れ眞の大善知識にして始て、佛を毀り、祖を罵り、經、律、論の三藏教を排斥し、諸小兒の惡知識をも一々罵倒して、逆行順行、自由自在に働きたいまゝに働く、而して其の逆順の中に向つて一箇半箇眞の種草を捉らへて、鍛冶屋の粗金を鍛鍊する如く、百鍊千鍛手段を盡して接得して、人天の眼目とも、天下の人の蔭涼樹とも成るべき大法器の人を出すのである。彼の前に云ふ所の無眼子の如く世間の毀譽褒貶を怕れ、世間に媚諂ふが如き卑怯未練なることは聊かもない。大惠も、天下の惡知識を罵つて佛祖の恩を報ずと云つて居る。又眞の善知識たるべき者は、逆順の中に向つて人を覓むる底の受用が第一

向逆順中覺
人

肝要である。順行のみにては學者の志は分るものでない、逆行順行並行ふ上に於て始て知れるのである。又善知識の働きは、逆行順行天も測るなしと云つて、佛祖も手を挾むことを得ず、魔外も窺ふことが出来ない。況や凡見の窺ひ知る所でない。彼の丹霞禪師は木佛を、燒き、南泉和尚は猫兒を、斬り、宗道者は袈裟に草鞋を包み、趙州和尚は草鞋を脱して頭に戴て出づ、是の如き働きを見るときは、無眼子の輩は寒毛卓豎するであらう。古の大善知識、大活眼の衲僧は何れも皆是の如くである。今此の方も大悟して以來最早十有二箇年となるが、其の間時々刻々佛祖を毀り、三藏教を排斥し、諸方の惡知識をば一々以て罵倒すれども、世間の無眼子の如き身口意三業と云ふ者は芥子ばかりもない。彼の新婦子の如きは、舅、姑に恐れたり、小舅、小姑に氣兼ねしたり、萬事遠慮勝ち

若似新婦子
禪師便不與
趣出院不與
飯喫不安樂

な者であるが、其れと同じこと、卑怯未練なる悪知識は、或は口業を生ずることを恐れ、或は壇徒、信徒の衆から寺を趣出されては、忽ち路頭に窮しはせまいかと憂ひ、或は又忌日の施に預らざれば、餓えて死にはせまいかと虞れ、自ら三界の大導師たる職に在りながら、人の悪を見て譴責もせず、言ひたきことも能く言ふこと能はず、何事に依らず遠慮ばかりして、世間に媚諂つて居る。今此の方は斯様な悪知識をば、徹頭徹尾罵倒して呉れる。今時別して此の如き悪知識が麻の如く、粟の如しだ。不肖者は必ず其の過を言ふことを惡み、其の己に順ふことを悦ぶ、賢達之士は過を言ふことを惡まず、己に順ふことを悦ばない、唯智者は能く過を改め善に遷り、愚者は多く過を蔽ひ非を飾る、其賢不肖固に霄壤の隔がある。古よりの先輩、明眼の祖師達を見るに、前の新婦子の如き

自古先輩到
處人不知被
遞出始知是
世

漢とは大なる相違で、輕薄がましき事もなく、向上の眼を以て自由自在に働く故に、到處として人に信仰せられなかつた。結句此處彼處で趣出されて果された。今我熟、惟みるに、古よりの先輩何れも皆到處で趣出されてこそ、始て寔に貴き大善知識であると云ふことを知ることが出来た。彼の達磨大師が、初め梁の武帝に見えたとき、帝問ふ、朕寺を起し、僧を度す、何の功德が有る、磨云く、無功德と、是は武帝の隨分と思つて問はれたのである。然るに達磨、慕向本分の上より答へられた。是に於て達磨も遂に梁の國を趣出されたが、亦達磨の達磨たる向上の所も、是に於て判明した。寔に貴ぶ可きことである。我が祖宗門下は、向上を以て本とする。今時の悪知識であれば、右の如く問はれたなら、其れは誠に御奇特千萬なる御志である、其の功德の程は實に廣大無邊なることとて

あるなど、云つて詔つて答へるであらう。若し斯様に答へたなら、定めて御意にも協ひて、御馳走にも預り、御布施も多分に載けるであらう。末世の比丘の淺ましさには、道德をも修めず、耻辱をも顧みずして、名譽があるとか、地位があるとか、富貴であるとか云ふ人の門には、尾を揺かして憐を乞ひ、寵遇を求むること恰も犬の如くである。實に憐むべきことである。正法を汚すこと痛嘆に餘りある。是に至つては、賀州の百萬石の威勢を以ても、荷んの其の百萬石も物の數と云つて動かなかつた一俳諧師の一茶が懐しく思はれる。又彼の懶瓚和尚は、衡山の石室の中に隠居して居られた所が、唐の肅宗皇帝が其の名を聞いて使を差遣はされた、使者其の室に到つて「天子詔あり尊者當に起つて恩を謝すべし」と宣言せられた所が、懶瓚和尚は其の時牛糞の火を撥いて煨芋

を尋ねて食して居られた、煙たいものだから涕を流して未だ御返答申上なかつたが、使者之を見て笑ひながら、且らく勸む尊者涕を拭へ」と云はれた。此の使者は是の如き高德者に對する禮を失して居る。瓚曰く「我豈に工夫の俗人の爲めに涕を拭ふこと有らんや」と云つて、竟に應じなかつた。今時の學者、否宗匠方には、斯の如き崇高の精神が缺乏である。若し到處に人が盡く肯ふやうなことで、什麼を爲すことが出来るであらうか。確乎不拔の精神がなくては、天下の大事業を爲すことは到底出來はしない。よし肯はれなかつたとした所で、何程の事が有るであらう。世間多くの惡知識共が、權勢の門に詔ひ、聲名を博せんが爲めに、大きな看板など掲ぐれば、學者之に趣くこと、臭肉に蠅の集まる如く群り、偏に大善知識であると云つて、隨喜渴仰して居る。實に片腹痛きこ

とである。併し獅子一吼すれば野干の頭腦が破烈すと云ふが、其の如く眞の大善知識、大活明眼の衲僧の吐出す言葉は、一言半句たりと雖も、萬仞懸崖の境界であるに依て、野狐の變化の如き悪知識共は、之を聞くや否や、徹骨徹髓驚怖戰慄するのである。今も此の方が是の如く佛を毀り、祖を毀り、天下の知識を是非し、三藏教を排斥するを聞いて、彼は少しも口業を顧みない、今に冥罰到るであらう、實に恐ろしき事を云ふ者であるなどと云つて、彼の小鳥が鷹に威されて木蔭に身を潜めて、氣を呑み、聲を飲んで居るが如く、舌を捲き、身を震はせて居る野干の如き臆病未鍊な者もある。實に笑止千萬である。眞正の眼を具したる人には佛罰神罰と云ふ事はない。佛神三寶の罰の當ると云ふは、皆是根本の事を知らぬ者の上の事である。

道流諸方に「道の修す可きあり法の證す可きあり」などと云つて居る老宿も在るが、何の法を證し、何の道を修するのであるか。古人云く「吾宗には語句も無し又一法の人に與ふるものなし」として見れば、更に一塵一法として修すべき法も、證すべき道もない筈である。此の法は人々分上豊かに具はつて有つて、而して目前頭々物々の上に應現して、著衣喫飯、屙屎送尿と曾て事を缺いた事がない。此の不足なき處が即ち眞佛、眞法、眞道である。是に於て少しも手を下す處はない。然るに諸方の老宿の修すると云ふのは、何處か縫罅缺損の場處でも在るであらうか。此の大道に於ては天地開闢以前より直に今日に至るまで完全無缺である。故に少しも修補すべき處とてはない。然るに未だ根本の事を知らない後生の學者に對して彼の野狐和尚、佛祖の説置かれたる所の

文字言句を記憶して居て、道は理行相應し三業を護惜し始て成佛を得など、しかつめらしく古人の口眞似、鸚鵡說法すれば、學者之を聞いて歡喜に堪へず、眞の善知識であると意得、之を諸方に吹聴して云ふやう、彼の和尚は談儀說法も上手で、坐禪觀法も確である、特に戒律堅固で、實に行解相應の殊勝な和尚である、生佛であると。今時別して是の如き筋ない事を説いて、初心な學者を籠絡する惡知識が春の細雨の如く、天下到處に滿ちて居る、各決して油斷をしてはならない。古人も、路逢達道人、第一莫向道と云はれて居るが、諸人、佛道の沙汰をするとも、餘の處は兎も角も、此の臨濟面前に於てすることは眞平御免だ。根本の上には迷悟得失の沙汰はない。所以に古人も、若し人道を修すと云はゞ、其れは眞道と云ふ者ではない。芥子ばかりも修道の念を生ぜば萬般

如此說者如
春細雨

路逢達道人
第一莫向道

智劍出來無
一物

明頭未顯暗
頭明

の邪境が頭を競ふて出生する」と云はれて居る。修道と説くも不修道と違つたことはない、無心と説くも有心と違つたことはない、有心の處にも在らず、無心の處にも住せず、道と云ふ名もなき處が即ち眞佛眞道である。此の田地に到得ば、萬境自ら空にして處々安閑となる。假令萬般の邪境が頭を競ふて出て來るとも、衲僧が所持する所の金剛王寶劍とか、或は吹毛劍とか銘打ちたる此の那一劍、一たび鞘を脱するときは、本來無一物で、只一劍天に倚て寒きばかりである。其の無一物の境界は如何なる處であるかと云へば、明頭未だ顯れざるに暗頭明なりて、則ち心性の心地に藏れて居たる本體が、縁に應じて顯はれて物を利する、所謂暗中明あり、明中暗あり、明暗雙々底の處が、即ち無一物の境界である。而して此の道は頭々物々の上に歷々として現れ切て居る、所以

に南泉和尚も「平常心是道」と云はれた。各平生著衣喫飯、行住坐臥、一切の所作所爲の上に於て用ひて居る。是れ即ち本來の大道である。諸大徳此の如く平常心是道と用ふれば、什麼物も求むる者ではない筈である。然るに什麼物を求めんとする。即今目前說法聽法する所の無依の道人、是即ち汝等が尋常求むる底の者である。此の者は則ち歴々分明にして而も舉足下足、頭々物々の上に應現して、昔より今に至るまで、未だ曾て缺くる處はない。諸人、若し釋迦、達磨と同一體の理を識得せんと欲すれば、只此の方が云ふ如くに、行住坐臥の處に是這の什麼物ぞと看よ。是の如くに眼を著くるときは、時節因縁を経ずして、忽ち此の道に入得し、自己是元來祖佛と別ならざる底の者であつたと云ふことが合點出来るであらう。決して間違つた事は云はないから安心して能く

汝心々不異
名之活祖

性不異故即
性與相不別

受用するがよい。諸人、現成即ち是本分、本分即ち是現成と、内外の兩心が同一なる底を知り得て、能く是を受用することが出来たなら、是即ち眞の大活明眼の祖師と云ふべきである。若し内心と外心と、即ち本分と現成とが異つて居るなら、心性と色相とが隔別であれども、祖佛の心も、衆生の心も、本分も、現成も、少も相異ないに依て、即ち自己の本性も、亦此の色相も皆一如となり、何んの差別もない。行かんと要せば、則ち行き、坐せんと要せば、則ち坐す。是即ち性と相と別ならざる端的である。畢竟身心不二である。然るに迷人は心性と諸相とは別物であると思ひ、世法佛法二つに見るに依て、念々相續して大休歇の田地に到るとが出来ない。柳、櫻とは誰が名を著けたのであらう、山川草木とは什麼物が喚出したのであらうか、皆是心性の上より流出したのである。又水を汲

み薪を拾ふ此の働は誰がさすのであらう、皆是眞佛眞法の
上より流出したのである。決して世法佛法二つはない、溪聲
便是、廣長舌山色豈非清淨身。

第九章 如何是心々不異處

道の本源に至つては何事も問ふべき事も答ふべき事も
ない。然るに汝が問はんと擬す既に身心不二の理と相異し
了つて、本性と色相と各別々に成つたのである。道流根本の
上には世法も佛法もない、又自己の本性と云つて取認む可
き者もなければ、勿論生涯の色相と云ふ者もない。若し之を
在る者であると思つて錯つて差別の見を生じてはならな
い。是の如くに諸法を悉く掃蕩し去て、而して其の後には什
麼物が残つて居るであらう、只這箇空名のみである。今此方

如何是心々
不異處師云々
汝擬問早異
了性相各異
分也

但有空名名
字亦空

設有皆是依
變之境

が空名のみ有りと云へば、亦其の空名を認著するのであら
うが、空名と云ふ名字も亦空である。此の眞空なる者が即ち
萬法の主となる者で、此の眞空の理を能く證得したる者を
佛とも、祖師とも云ふのである。又此の眞空の理に到得れば、
是もなく、非もなく、得もなく、失もない。故に古人も、心は虚空
界に同じ虚空に等しき法を示す虚空を證得するとき、是も
なく、非もなしと云はれて居る。設ひ佛と云ひ、祖師と云ふ者
が在るとした所で、皆是三界依變の境である。總て因縁和合
に依て起りた者は必ず一度は變滅を免れない、先づ吾人の
身の上に就て考へても、生るゝかと思へば段々年寄る、年寄
るかと思へば病氣する、病氣するかと思へば忽ち死ぬる。一
切萬法も皆是此の道理であつて、一つも實體ある者ではな
い。釋迦、達磨と雖も、此の色相を受けて出現せられしからは、

終に變滅を免ることは出来なかつたのである。然るに他の閑名を認めて眞實の思を爲すは、大なる錯である。さて依變の境と云つても、種々の依變の境がある。先づ其中の重なる者を擧げて見れば、菩提依、涅槃依、解脱依、境智依、菩薩依、佛依等の閑名は皆悉く依變の境で、一々以て眞實の者でない。然るに此の依變國土の中に向つて什麼物をか求めんとする、眞佛眞法と云ふ者は、此の依變國土の中に在る者ではない。又佛一代四十九年の説法、三乘十二分教は、衆生の病に應じて與へられた薬である。祖師一千七百則の公案は、敲門の瓦子である。薬は病を癒やすに就ては必要であれど、病治まるときは薬に用事はない。瓦礫は門を敲くには必要であるが、既に門内へ入得た後は瓦礫に用事はない。其の如く一代藏經も衆生の煩惱妄想の不淨のある間は必要であるが、既に

三乘十二分
教皆是拭不
淨故紙

佛是幻化身
祖是老比丘

悟得たる者の爲めには反故同様である。又汝等が尊び奉る所の大聖釋迦牟尼佛と云つても、此の世界に生を受けて出て來た以上は、何時迄も存へて居れる者ではない。して見れば畢竟幻化身で、實體ない者である。又達磨と云つても、年寄た禿頭の比丘である。格別世人と異つた所はない。然るに還て汝等ばかりが佛祖と異つて、母親の胎内より生落ちたる迄で、年も取らず、死もせないと云ふ譯はない。して見れば佛祖も、汝等も、生死に於て異つた事はない。皆同じく幻化身である。諸人、若し之を捉へて眞佛の思を爲し、成佛を希求するならば、是即ち佛魔の爲に捕虜と成たのである。汝等若し祖師に成らんと欲すれば、是即ち祖魔の爲めに縛せられなのである。元來求むる者としては一箇半箇もない。然るに諸人、若し造作して佛を求め、祖を求めんとするのは、我と自ら苦を

汝若求佛即
被佛魔攝

汝若求祖師
被祖魔縛

求め、苦を招くやうな者である。其よりか只馳求の心を歇得して無爲無事にして居た方が迥に勝つて居る。

さて茲に一種の淺間しい悪知識が在る。此の和尚唯藥鐘頭を能として、學者に向つて而して云ふ、佛は是究竟である、三大阿僧祇劫の長い間修行して、其の果が圓滿して、始て成佛せられたのであると。道流若し佛が究竟であるとすれば、古より直に今に至るまで死にもせないう急度存へて居られる筈であるのに、何に依て八十歳を一期として、立往生でもせられることか、拘尸羅城雙林樹の間に於て側臥して入滅せられたであらう。此の和尚の究竟と云ふ佛は今什麼處に居らるゝであらうか、鐘や大鼓で探して見た所で見附けることは出来はすまい。して見れば我等が生死と同事で少しも異た事はないと云ふ事が明に知れてある。

佛是究竟

三十二相八十種好

さて又言ふ、三十二相、八十種好を具して居らるゝのが佛である。然らば問ふ、轉輪聖王も此の相好を具して居らるゝが、是も如來と云へるであらうか、決して轉輪聖王を指して如來であるとは云へないであらう。是を以て能く辨別して見ると、佛は必定幻化の身で、究竟でないといふ道理が明に知れてある。斯様に此の臨濟が云ふばかりでもなく、古人も元來法身の如來は肉身を受けないう依然として本分の田地に安住して居られる併しながら一切迷倒の衆生が斷無外道の見を生ぜんことを恐れられて其の邪見を破て本來の大道に導かんが爲めの故に世間の人情に順し權りに如來の名を建立した迄て根本の上より見れば三十二相八十種好と云ふも皆是閑名空聲のみで眞實の者でない總て形相ある者は覺體と云ふ者ではない本覺の正體眞實の佛

と云ふ者は本來無相無形無住處なる者である之を本源自性の天真佛と謂ふと云はれて居る。此の無相無形の天真佛を人々悉く此の五尺の佛殿に安置して居ながら、其を差措て外に向つて如來を求め、成佛を願ふのは大なる見當違である。自眼明かならずして如來の相好を拜見せんと欲するのは、丁度鏡の裏に向つて己れが顔を映さんとする程の事で、如何に見やうとした所で決して見ることは出来ない。自己一面の古鏡を磨いたなら、十方三世の諸佛、諸菩薩も、代々此の鏡中に現し、十二時中斷えず拜見することが出来るのである。若し有相を認めて佛とせば、佛魔の爲めに虜とせられ、身心共に不自在になつて、眞の如來を見ることは盡未來際に至るとも出来ないであらう。

又道ふ、佛は天眼通、天耳通、宿命通、他心通、身如意通、漏盡通

汝道佛有天通

の六神通を具して居たのである、實に不可思議である、殊勝な事である。然らば問ふ、一切諸天、諸神、阿脩羅等の鬼神魔王も、皆是神通を具して居て奇特を現すのであるが、是等も佛と云へるであらうか、決して諸天、諸神、阿脩羅等を指して佛と云ふことは出来まい。して見れば佛に六通ありと云つて殊勝なとは云はれない、格別諸神と異つた所はないのである。衲僧家の神通は喫飯著衣の外にはない。龐居士は神通並に妙用水を運び柴を搬ぶと云つて居る。人々六神通は具して居れど、百姓は日に用ひて知らずである。道流、錯て會してはならない、彼の阿脩羅と天帝釋とが合戦して、阿脩羅は忽ち敗北し、彼の八萬四千の眷屬を引率して逃れて藕絲孔中に入つて藏れたと云ふが、此の如き神通自在なる働きは實に稀有なることである。若し神通あるのが佛であると云

ふなれば、此の阿脩羅の魔王も、亦は大聖の佛と云はねばならん、まさか何脩羅を指して佛と云ふことは出来まい。今此の臨濟が最初より一々枚擧して説く所を能く辨じ了つたら、諸人の殊勝がる所の者は業通で、色々の難行苦行の結果得られた所の通力である。又是依通である、萬の所作に頼つて神變奇特を現はす所の通力である、何れも眞實の法ではない。佛の六神通と云ふのは前の如き神變奇特を云ふのではない、色界(男女の容貌端嚴及び世間の重寶財物種々の妙色等)に入つて色惑を被らず、聲界(管絃の聲及び男女の歌詠語話戲笑等)に入つて聲惑を被らず、香界(男女の身香飲食の香及び世間一切の香氣等)に入つて香惑を被らず、味界(飲食者等)に入つて味惑を被らず、觸界(男女の身體柔軟)及び寒冷等)に入つて觸惑を被らず、法界(世間一切の妄顛倒總て)に入つて法惑を被らない、是が即ち佛の六神通である。然るに迷人は此の色聲香味觸法の六塵を眞實の者であると認めて居

夫如佛六通者不於色界不被色惑

雖是五蘊漏質便是地行神通

るに依て、憎愛取捨の念を生じ、種々様々の煩惱妄想を起し、無繩自縛を受けて不自在極まつた者と成つて居る。併し此の六種の色聲香味觸法は如何なる者であるか、又此の者は什麼處より生ずるか、其の根源に溯て見れば、此の六種の者は別に外より生じた者ではない、皆是空相より生じて、復た本の空相に歸する者であると云ふことが分る。是の如く元來空相なる者であれば、一塵一法として此の無依の道人を繫縛することは出来ない。さて此の五尺の形骸は、五蘊と云つて、色受想行識の五つの者が積聚して、有漏煩惱の此の姿と成り固まりたる者である。併しながら右の六種の色聲香味觸法を能く受用して見れば、此の五蘊の働きの即ち地行の神通と成るのである。飛行神通は眞の神通ではない、之れが殊勝であれば、鷲や鴉も殊勝である。地行神通とは擧足

下足の上が如意自在に動く、則ち人間今日の上の神通である。能く眼を著て看よ、此の五尺の形骸の中に地行神通を爲す者が居る。之が即ち眞の佛である。

道流眞佛無形眞法無相

道流上來述ぶるが如く、眞佛は無形なる者である、眞法は勿論無相なる者である、夢聊も形相ある者と思つてはならない。然るに諸人は此の眞佛眞法を知らずして、日々夜々唯幻化頭上の實體なき者の上に向つて模をなし、様をなし、種々様々な事をして佛を求め、法を求めんとして居るのである。斯の如くにして百千萬劫を経るとも到底根本の道理を知ることは出来ない。設ひ幻化の中に於て佛を得た、法を得たと云ふ者が在つても、皆是野狐の變化である。決して其れが眞實の佛でも、法でもない。是の如き見解は皆是外道の見解である。夫れ眞正參玄の上士、明眼の衲僧と云ふ者は、釋迦

迥然獨脫與物不拘

達磨より直に今日に至るまで、何れも皆平生の受用が大に世間の人と異つて居る。又其の殊勝とする所も大に異つて居る。如何に異つて居るかと云へば、諸人が殊勝として居る所の佛をも取らない、菩薩羅漢をも物の數ともしない、又一切世間の相は一つも殊勝として秘藏することはない、迥然獨脫にして物の爲めに拘束せられない、脱體現成底である。然し眞正參玄の上士の脱體現成底に於ては何か世間の人と異つたことでもあるかと云へば、何にも異つたことはない、春が来れば花が咲き、秋が来れば紅葉が散る、柳は緑に、花は紅、鳥はカア、く、雀はチャ、く、僧は僧形をたしなみ、誦經禮拜したり、或は坐禪觀法したり、如法に出家の道を守り、俗人は孝悌忠信の教を守り、治生産業を勵み、三寶を供養して、只あるべきやうに用ひる、是則ち物と拘らざる脱體現成底

の境界である。然るに迷人は物の爲めに拘束せられて多くは放逸無慚に日を送る。今時別して此の如き因果撥無の邪魔外道が多いのは寔に慨かほしきとである。人々此の五尺の形骸の中に於て、餓ては飯を喫し、困しては睡むり、行かんと要せば則ち行き、坐せんと要せば則ち坐し、活潑々地の働を現はす者がある、是畢竟什麼物であるか。是則ち淨裸々赤洒々として目前に現成する底の者である。此の者は元來無形無相であるが故に、物の爲めに拘束せらるゝことはない。然るに色相の上に於ては、三千の威儀八萬の細行と云ふこともある。又儒者にも禮儀三千威儀三百と云ふこともある。決して錯て會してはならない。各自に骨折て此の邊の消息を知らねばならん。眞の明眼の衲僧の受用は世間の者とは天地懸隔して居ると云ふのは、此の物と拘らざる底の境界

乾坤倒覆我
更不疑

我見諸法空
相變即有
變即無三
唯心萬法
識唯

に安住して居るが故に、即今目前乾坤倒覆すると雖も、ピクともするものでない。又三世十方の諸佛諸菩薩が同時に出現したとて、決して殊勝とも奇特とも思はない。一拳に拳倒じて呉れる、又三塗地獄が足下より現出すとも、少しも怖るゝことばない。一趨に趨翻して呉れる。何に縁て此の如く十方の諸佛が現前しても一念心の喜びもなく、三塗地獄が顛に現ずとも一念心の怖もないかと云へば、我が此の根本の眼より見れば、所有世間の法は皆悉く空相なる者である。此の空相の妙用が無而忽有と變化するとき、即ち有相の諸法と現はれ、其の諸法の有相を轉じ去れば、復た本の空相に歸するのである。此の三界は悉く皆唯心の所造である。而して萬法は悉く皆唯識の所變である。二つとして眞實と認むべき者はない。畢竟夢幻空華の把捉す可からざるが如き

者である。故に喜ばしいこともなければ、怖しいこともない。又此の三界は須臾に變滅して暫時も住する者ではない。故に經に「世界牢固ならず水沫泡煙の如し」と説かれてある。然るに諸人久遠の思を爲して、色相を把捉して得失是非を論じ、貴重なる光陰を空しく送るのは實に慨かほしきことである。道流上に述ぶるが如く此の三界は夢幻空華の如き者で、一箇半箇實と認む可き者はないのであるが、唯即今目前聽法底の那一人のみあつて、古に亘り、今に亘り、照々靈々として缺ぐることもなく、餘ることもなく、火に入つても焼けず、水に入つても溺れず、三塗地獄に入つても、園觀に遊ぶが如く、餓鬼畜生の中に入つても少しも其の惡報を被らない。何に縁て此の如くあるかと云へば、此の無依の道人の境界に於ては、嫌ふ底の法なきが故である。嫌ふ底の法がなければ

入三塗地獄
如遊園觀

ば勿論好む底の法もない。又得失是非、凡聖憎愛等の見は少しもない。若し是に於て一念心の疑を起して、上諸佛を愛して尊貴の思を作し、下衆生を憎みて遠離の念を生せば、生死の大海に浮沈して永劫出離することは出来ない。故に凡聖の二見を截斷して、只片時も早く生死海裏を出離するのが肝要である。生死に預るのは煩惱業障の深い故のことである。然らば其の煩惱業障と云ふ者は何處から起つた者であるかと云へば、人々一念心の生ずる處より起つた者である。故に其の一念心の生ずる源を截斷して、無心の根源に到達したならば、設ひ八萬四千の煩惱が一時に起つても、決して此無心の道人を繫縛することはない。若し能く自己に返照して、無心の落居を識得すれば、思慮分別を費さなくとも、自然と大道に入得することが出来る。萬里一條の鐵と用ひた

煩惱由心故
有無心煩惱
何物

不如無事向
叢林中
頭交脚坐

なら、即今にても、得道するものが出来るのである。所以に佛も「勇猛の精進の爲めには成佛一念にあり懈怠の衆生の爲めには涅槃三祇に亘る」と説かれて居る。諸人、若し此の臨濟が云ふ所に背きて阿方彼方と周章狼狽して、此の道を文字言句等の上に向つて學得せんと擬せば、三大阿僧祇劫の長い間を経て、終に生死輪回を免ることは出来ないであらう。其よりが三條椽下七尺單前に向つて、ありたいまゝに膝打組んで坐つて居た方が遙に増してある。聊かたりと雖も馳求の心あれば、大休歇の田地に到ることは出来ない。心に無心に、事に無事になれば、造次顛沛の上が即ち大休歇の田地となる。各憤勵して「了事納僧消一箇長連床上展足臥」の境界に到らなければならぬ。道流、大活明眼の衲僧の家風は、諸方の雲衲が訪道參禪の

主客相見

機權語路

爲めに到來する事あれば、先づ賓主共に威儀を具して相見する。相見し了つて、而して學人便ち一喝を下すか、或は大死底人却活時如何とか、或は又南泉遷化向甚處去とか云ふ如き、一言半句吐出すときは、當機觀面に其の學者の具眼の者であるか、不具眼の者であるかを直に見て取る。蛇三寸を出せば其の大と小を知る、人一言を出せば其の長と短を知る」と云ふ、特に明眼の師家は學者が機を含み來つて問話する者であるか、否と云ふことを勘辨して、不許夜行投明須到とか、石頭爲沙彌時會見六祖とか酬答するのである。學人又、不問爲沙彌時南泉遷化向甚處去と云ふ如き機權語路を拈出して、師家面前に抛出して、識不識如何と驗みる。然るに師家が學者の拈出し來る所の者は話頭であると云ふことを識得して居るならば、決して學者の爲めに勘辨せらる

把得便拋向
坑子裏

、ことにはない、却て學者を把得して一喝を下すとか、一棒を
與へるとか、或は又「教伊尋思去」とか云つて、萬尋の坑子裏に
眞逆様に抛込むのである。然し、伶俐の學者であれば、坑子裏
に抛込まれて居ながらも、泰然自若として、少しも動著しな
い、さらぬ體に持成して、暫く默然として、然る後に、是は善知
識であると思ひ、賓主の禮を正し、さて云ふやうは

大慈大悲どうか御垂誨の程を偏に御願ひ申しますと
徹底師家を勘辨せんとするは、青出於藍、青於藍、冰生於水寒、
於水である。併しながら師家も明眼の師家であるから、點滴
たりとも施すものでない、依然として孤危險峻に出掛け、驅
耕夫牛奪飢人食、底の手段を以て學人の機を奪取する。學人
曰く

學人云上智

最前より御接得のほどを熟拜見致します所中々以て

識哉是大善
智識

諸方の師家の到底及ぶ所ではありません、實に五百年
間出の大善知識とは、老大師阿方の事でありましよう

と
師家を嘲弄せんとか、つた。龍蛇は辨し易いが、衲子は謾じ
難い。師家云く

汝大不識好
惡

貴様は全體何を見て左様な事をぬかすかい、到底貴様
達の分際で物の好いも悪いも分つてたまるものかと
思ふ存分學者を罵倒せられた。無眼子の師家であるならば
直に學者の鉤に上つて手を把るであらうが、然し師家が明
眼であるに依て却て之を抑下せられた。衲僧家に於ては人
に譽められたと云つて譽められても居ず、謗られたと云つ
て謗られても居ない、又譽むる中に謗り、謗る中に譽むるこ
ともある。之を抑下の卓上、卓上の抑下と云ふのである。即ち

偏正回互の端的、明暗雙々底の受用である。是迄は學者より師家を見た方で、師學共に明眼で、賓主互換の商量であつた。次は師家より學者を見る方であつて、亦好主好賓で、賓主互換の商量である。

眞の善知識の如きは、學人在つて面前へ出て來れば、乃ち一圓相を畫き、或は拂子を豎起し、或は又生死到來、向、什麼處回避、とか云ふ如き境塊子を拈出して、學人の面前に向つて玩弄して、具眼の者であるか無眼子であるかを驗みる。然し師家が境塊子を餌に、釣つて之を驗みんとするも、學者が伶俐俊發の衲僧であれば、其の機を逸せず。

某甲如き未熟な者は一向左様な儀は存じませんと下手に出て來て、却て主人公と成つて、少しも師家の拈出したる境塊子に惑亂せられない。如何に重寶な骨董品を如何

如善知識把
出箇境塊子
向學人面前
弄

前人辨得下
下作主不受
境惑

善知識便即
現半身

學人便喝

善知識又入
一切差別語
路中擺撲

程陳列して見せても、客人が一顧も拂はなければ致方はない。師家便ち學者の機を見て、表面菩薩の面を以て學者と知音底の如く装ひ、裏面夜叉の如き毒々じき心を以て、手段を換へて學者を認めんとする。學者其の句中に當つて間に髪を容れず何にをチヨ小才なことをぬかすかいと云はぬばかりに

喝と

一喝を下した。師家は學者の一喝を下すを見て、此の僧は眞の種草とも成る可き者であると思ひながらも、今少しく見届て呉れんと、法窟の爪牙、奪命の神符とも云ふ可き話頭や、或は首山綱宗の偈、汾陽の十智同眞、或は五位、十重禁戒等の如き種々の難關等を拈出し、又或は抑揚褒貶縱橫無盡に學者を鍛鍊する。學者聽て其の機を見て取り

學人云不識
好惡老秃奴

善知識歎曰
眞正道流

エト此處の老漢は物の好惡も分からぬ和尚であるわ
い老々大々と頭の秃た形をして人を馬鹿にするのも
程がある大概にして措いて貰ひましようかいと
思ふ存分罵て云つた。然し抑下の卓上である。師家は學者に
罵られて居ながら、却て學者を讚嘆して

凡そ世間廣しと雖も貴公の如き眞正見解の學者は又
と二人とはありはすまいと

是の如く師學共に、作家の相見は實に龍滄海に戯れ、虎南山
に嘯くの慨がある。次は師家が無眼子で學者は明眼である。
今時諸方の善知識と云はるゝ者を見るに、多くはは無眼
子の輩のみである。故に學者が出て來ると雖も、根本の道理
を識得して居る者であるやら、識得して居ない者であるや
ら、龍であるやら、蛇であるやら、一切其の邪正を辨別するこ

瞎老師

とが出来ない。其れ故學者が問頭に別に用事のあるのでは
ないが、只師家の具眼か不具眼かを勘辨せんが爲めに、菩提
とか涅槃とか、三身とか云ふ如き教中の事を問へば、元來無
眼子の師家であるからして、眞に之を用ありて問ふならん
と思ひ、彼の教相家が經文の講釋をする如く、學人に向つて
菩提涅槃、三身等の上を文字言句に涉つて微細に其の義理
を説立つる。實に笑止千萬である。無眼子とは此處のことと
ある。然し學者は明眼であるから、師家の無眼子なることを
直に見て取り、惡水を蕪頭に注ぎ掛ける。然るに師家は自尿
臭きを覺らないで、憤然として怒り、棒を把つて學者を打し
て言ふ

貴公は一體師家に對する禮儀を知らないと
棒にも正棒、瞎棒等の種類がある。是等は眞の瞎棒である。師

便把棒打他
言無禮度

汝善知識無
眼不得嗔他

家として學者に罵らるゝは、師家、汝が眞正見解の眼を具して居ない故のことである。眞正見解の眼を具して居さへすれば、學者が如何に罵らんとした所で、罵る隙間はない。畢竟じて見るときは、師家、汝自身の咎で有つて、敢て人我の見を起し、嗔恚の念を萌して、他の學人を打ちつ、叱りつすることは決してならん。次は師學共に無眼子である。

茲に一種の物の好悪も分らない老僧がある。此の老僧は自己の心の決定もせずして、尋常賣卜者の如き奇特らしい事を云つて見たり、或は又破燈籠の如き何の役にも立たぬ骨董品を集むるを能として居る。燈籠も四方張立て、其の内光明赫耀たる燈籠を買求めるなら、第一自己の脚下を照らし、人も亦其の光に浴することも出来るのであるが、破燈籠に執著して居ては、生涯闇で送らねばならぬ。此の老僧破

汝看眉毛有
幾莖

燈籠の如く内心明かならず、自己の脚下をも照顧することが出来ないで、文字言句の上に向つて知見解會を逞うし、佛だの法だのと、種々の義理を説立て、自ら過つのみならず多くの人を誑して宗匠顔をして居る。諸人、先づ斯様な詰らぬ事を説いて廻はる老僧の眉毛を、念を入れて能く數へて看るがよい。幾本残つて居るであらう、定めて眉鬚墮落して癩坊に成つて居るに相違ない。何故左様にあるかと云へば、悪知識共の吐出す事は、如何に辯舌巧でも、皆鸚鵡の人真似であるのみならず、内證も作業も禽獸に墮落して居るから、其の吐出す事が一々妄語となる。此の妄語の罪に依て癩坊になるのである。然し斯様な悪知識で在つても、同聲相應じ、同氣相求む、水は濕へるに流れ、火は燥けるに就くの道理で、縁機縁が有つて、其の會下にも學者の多く聚ることもある。又

信徒なども澤山に、堂塔伽藍なども立派に建立せられ、住持高僧なども仰がれて居る。是皆宿縁の然らしむる所て、決して其の人の道行圓滿て、其の徳に化せられて是の如くにあるのではない。寺門繁興し、佛閣經卷金銀を縷め、多衆開熱なるがゆゑに、道德が高いとか、又寺が小寺で會下の衆が少いと云つて、其の住持は道德が低いとも云へない。縦ひ三間の茅屋に一衣一鉢で、折脚鐺内に野菜根を煮て喫して日を過して居ても、眞に道心堅固で、專一に己事を究明する底の漢であるならば、眞の禪僧、眞の佛弟子である。斯く云ふ臨濟も小院に住持して會下の僧僅に七八人しか居なかつたこともある。大善知識の中にも、人境共にない者も往々在る。然るに彼の悪知識前生の因縁て是の如くあるとは知らずして、無眼子の學者などは、信仰の餘りに、當今天下に善知識と稱

總是野狐被他
魅學人險々
好學人險々
傲笑言老
秃奴惑亂他
天下人

せらるゝ者は多しと雖も、恐らく此の和尚に勝る者は一人も在りはすまいなど、云つて、氣も心も狂亂せんばかりである。斯の如く、能く世間の者共が隨喜渴仰して居るのを熟思へば、決して尋常の者ではない、野狐か、但しは魍魅魍魎などの知識に變化し來つて、人を誑かして居る者と外思はれない。然し此の如き悪知識の野狐和尚と雖も、多くの人が隨喜渴仰して居るゆゑ、縦ひ具眼の學人と雖も、猥りに之を高笑することは出來ないから、冷笑して居る。如何に冷笑して居るか、と云へば、彼の和尚固より無眼子であるとは思ひながら、實に斯くも能く巧に化け、又能く巧に天下の人を惑亂することである。如何なる野狐も、之には及びはすまいなどと云つて、冷笑して居るのである。

道流、眞の出家、眞の佛弟子たらんと欲する者は、文字葛藤

道流出家兒

の研究は先づ差措て、專一に參禪辨道に精進せなければならぬ。多藝多能は第二の沙汰である。斯く言ふ此の方の如きも、徹骨徹髓身に染みて今に忘れ難い事がある。其は會で戒律を持つのが殊勝な事であると信じて、毘尼の中に向つて心を留め、亦會て文字言句の上に向つて這箇の事を識得せんとして、頻りに經論を研究したのである。後自ら所爲らく、斯くして假令佛一代藏經を悉く諳んじた所で、方には是濟世の醫方、表顯の説である。之は決して眞實の法ではないと遂に決然として道心を起し、經論等の研究は一切抛卻して、參禪辨道の爲めに行脚したのである。所が後因縁有つて、惡竦極まる大善知識の黃檗希運禪師に遇ふて、三度佛法的々の大意を問ふて、三度他の痛棒を蒙り、乃ち道眼分明にして、始めて天下の老和尚を見て、彼は眞正見解の眼を具したる

善知識である。此は無眼子の惡知識であると云ふことを識得することが出來た。未透の時は何れも皆殊勝な老和尚であるとのみ思つて居たのである。是決して母の胎内よりオギヤツと生落つるときから悟つたのではない。未だ正徳の釋迦、自然の彌勒なして、番々出世の祖師先徳と雖も皆同じと、二十年三十年玉の汗、血の涙を流して、夜の目も寝ずに酷苦艱難せられて、辛うじて悟道せられたのである。此の方も黃檗山に掛錫して、三年の間門を出てずして體究練磨の功積もり、力充ち、一朝に自悟自得したのである。決して樂々と悟つたのではない。然るに今時の者は大抵一夏か、二夏か、長く四五年、十年と僧堂に留錫して居る者は殆ど稀である。居士などに至つては亦一層甚しい。日曜日とか、暑中休暇等を利用して接心する位で、三年四年立つか、立たぬにはや大

事了畢したとか、一千七百則の公案を悉皆調了へて印可證明を受けたとか云つて居るが、未在、未在、更に參ぜよ三十年何して其位の事て佛祖不傳の妙道が手に入つてたまるものか。

道流、如法の見解を得たいと思へば、但萬境の爲めに惑亂せられてはならない。萬境の惑を受けさへしなければ、自然と見地明白に、受用堅固となるのである。如何に惑を受けつゝあるかとなれば、外萬境が來て内妄心に映じ、心が轉じて萬境に向ふ、故に念々相續して闇より闇に入る如く輪回迷惑するのである。故に只能く境に逢ひ、縁に著する所の妄念を捉へては、其場くくで殺しくくく盡して、内外玲瓏として、一塵一法を立せざる受用底が肝要である。佛に逢ふては佛を殺し、祖に逢ふては祖を殺し、羅漢に逢ふては羅漢を殺

道流汝欲得
如法見解但
莫受人惑

不與物拘透
脫自在

し、父母に逢ふては父母を殺し、親類眷族に逢ふては親類眷族を殺し、是の如くに其場くくで逢著の念を片端から截斷して、只能く堅固に受用して行くならば、必ず萬境の惑を解脱することが出来る。取違へしてはならない、截斷と云ひ、殺すと云ふも、太刀や、刀物を以て切殺すのではない、上無攀仰下絶已躬と用ひ爲す、是が即ち禪僧の截斷である。上に述べゐるが如く、諸相に逢著して種々の障礙を受けて不自在極めて居る、此の諸相を截斷して無心の境界に到得たならば、物と拘らず坐せんと要せば則ち坐し、行かんと要せば則ち行き、透脫自在である。此の物と拘らざる底の者は、是什麼物ぞ、是即ち佛を殺し、父母をも截斷する底の者である。此の者の境界を用得たならば、森羅萬象、天堂地獄、法々皆是現成一枚で、何の煩もなく居住自由である。自由の利かないのは截斷

の用不盡で、何物か遺されて居て、其の者が萬境の惑を受くるのである。例令は名譽心が有れば、名譽に關する事が起れば、忽ち其の惑を受ける。或は又財欲が有れば、損得に關する事が起れば、忽ち其の惑を受ける。截斷と、現成とを能く悟得たならば、何んの煩もない萬事自由となるのである。諸方の參學者の有様を熟觀察するに、或は佛惑祖惑を受けて居るが、或は名聞利欲等の惑を受けて居るか、何かの惑を必ず受けて居る。未だ物に依らずして我が面前へ出て來る者が一人もない。故に最初から學者の依る處、病の在る處を能く鑑定して、一々打つて除けて呉れる。或は兩手を展開し、一指を豎て、圓相を畫き、又手當胸し、禮拜などして模様を渉る者あれば、是等は病が皆手の上に在るに依て、手上に打つて除ける。或は言句を以て問ひ將ち來り、或は一喝を下すもの、是等

山僧向此間
從頭打

皆是上他古
人閑機境

山僧無一法
與人祗是治
病解縛

皆是依艸附

は病が口に在るに依て、口裏に打つて除ける。或は又揚眉瞬目するもの、是等は病が眼中に在るに依て、眼裏に打つて除ける。未だ曾て一箇も獨脱にして出來る底がない、皆是古人の言句葛藤に執著して知解情量を違うし、是と認めて居る。實に惘然の至りに堪へられない。山僧一法として人に説與す可きことはない。會一言半句吐出すのは、學者に種々の病が在つて、皆其の病の爲めに惱まされて自由を失つて居る。故に其の病を治し、繫縛を解いて、身心共に自由を得しめんが爲めである。望む所は、諸方の參學者の中に、出格見解の我と思はん者あらば、試に物に依らずして此の臨濟面前に出頭し來れ、我汝と共に這箇事を商量せんと欲す。世間は廣し、學者は多し、何時かは斯る獨脱無依の漢在つて出て來る事もやと、最早十有五箇年の其の間、心待ちに待つて居れど、遂

に一人もない、皆是依草附葉竹木の精靈、野狐の精魅ばかりである。實に情ない次第ではないか。總て宗師家としては獨脱の漢を求むるのが肝要である。彼の金牛和尚が毎日齋時に當つて、自ら飯桶を以て僧堂前に於て舞を作し、呵々大笑して、菩薩子喫飯來と云はれたのも、大顛が法堂前に於て舞を作したのも、皆是獨脱の漢を求むるの手段である。松子和尚は夾山を得て船を踏覆して死なれた。石鞏は三平を得て「三十年一張弓兩隻箭を以て今日只半箇の聖人を射得すと云つて便ち弓箭を拗折せられた。今時は斯様な知音底も無い、狐の子や狸の子を求めて愛するやうな師家ばかりである。宗門の荒廢其の極である。彼の野狐僧の平生底を偵へば、糞塊の如き何の役にも立たぬ文字言句に咬附いて生涯離るゝことを知らない。三乘十二分教是什麼の泥團土塊ぞ。文

字の端々、言句の切々を亂咬して居るのは、彼の狂狗の塊を逐ふと同事である。人の屎糞を咬む是好狗にあらずで、犬も上等の犬は糞は食はない。瞎漢是の如き有様で、他の十方壇越の信施を受け、而して我等如きが眞の出家である、眞の佛弟子であるなど、云つて居らば、假令一粒の米、亦一滴の水を飲んでも、皆悉く熱鐵丸と成るのである。實積經に「破戒の比丘は一切信施を受けないがよい」と説いてある、然るに惡知識共に限り、壇徒を騙して信施を強請し、只管取る事のみを喜ぶ。眞の出家は人の施を受くるは箭を受くるが如しと云つて怖れる。我毎に彼の經論を亂咬して佛を求め、祖を求めんとする者に向つて道ふ、元來無佛無法であるから、勿論修するの、證するのと云ふ事はない、然るに傍家に走り、他の寶を數へて什麼物を求めんとするのであるかと。瞎漢、人々

頭 瞎漢頭上安

其足の眞佛は目前分明に現はれて在るのに、何の不足有つて、却て之を外に向つて尋求むるのであらう。是は云ふ迄もなく、演若達多が己の頭の依然として在るにも係らず、頭を失却せりと云つて狂走したのと同じ事、實に愚の至である。道流、只即今目前說法聽法底のもの、是即ち釋迦、達磨と別ならざる底の者である。見々、是釋迦、聞々、是彌勒、少も違つた事はない。然るに汝等此の方の言ふ所を信ぜずして、便ち外に向つて佛を求め、祖師を求む、是の如くにして日を過さば、生涯は愚か、三祇百劫の年月を経ても、自己本來の面目、自然の大道を識得することは出來ない。錯て用心してはならない。外に向つて法を求めた所で得られるものでない。然らば内に向つて尋ねたなら得られるであらうか、決して然らず、内も亦不可得である。此の不可得底の者が、即ち内外中間に滯

莫錯向外無
法內亦不可
得

已起者莫續
未起者不要
放起

らざる底の者である。諸人、阿方彼方と狼狽して入らぬ造作をするよりか、山僧が云ふ所を能く信じて、馳求の心を歇得し、無爲無事にし去るのが遙に勝つて居る。然し斯く無事にし去れと云ふと雖も、既に一念起りたるものをば強いて相續せないやうに抑えて止めんとするのは宜しくない、止めんと欲すれば彌動じて、結句妄念が増すのである。亦未だ念の起らぬ前より念の起らないやうにするのも宜しくない、起らないやうにすれば、既に妄念が放起したのである。兎角念が起るとも、起るまいとも、其の様な事に頓著する必要はない。畢竟念の起るは什麼處より起るのであらうと、其の根源に徹底したなら、已起も未起も元來有るものでない。此の如く、只平生底を用得て有るならば、汝等が十年が間、東奔西走、草鞋錢を費して行脚したよりか、遙に勝つて居る。山僧が

癡人汝要出
三界什麼處
去

見處に約せば少しも七面倒な事はない、只平生底で、寒ければ衣を重ね、暑ければ衣を脱ぎ、飢來れば飯を喫し、困じ來れば眠る、何の煩はしき事はない、只ある可きやうにして、時光を過すのみである。諸人、諸方より此の方の處へ出て來る者も夥しいことであるが、無心にして出て來る底の者は一人もない、皆有心にして佛を求め、法を求め、解脱を求め、三界を出離せんことを求む、實に愚癡の至りである。試に問ふ諸人、此の三界を出て什麼處に向つて去らんと欲するのであるか。元來來た處もなければ、今更去る處もない筈である。然るに此の三界を出離せんと欲するのは、察する所、別の事ではありはすまい、必ず佛祖と等しからんことを願ふての事であらう。佛祖と云つて諸人が尋常賞讚する所の者は、只是繫縛底の名句で、決して眞實の佛祖と云ふ者ではない。諸人、是

三界

目前靈々地

非共三界を識らんと思ふなら、先づ此の方の言ふ所を聞くが宜しい。三界と云つて別に遠方に在るのではない、汝諸人が即今目前聽法底の心地を離れない。其れは別の事ではない、汝が一念心の貪欲、是が即ち欲界である。汝が一念心の嗔恚、是が即ち色界である。汝が一念心の愚癡、是が即ち無色界である。此の三つの者は汝が自己屋裏の家具子である。富貴の家にも、貧賤の家にも、多少の道具は人間生活上必要缺く可からざる者である。其の如く人々多少に拘らず貪嗔癡のない者はない。然し三毒は家具子と見たならば妄想はない。三界自ら我は是三界であると云つて名乗て出たことはい。還て是道流、即今目前照々靈々として山河萬衆を照燭し、十方世界を酌度する底の人より三界の爲めに一々其の名を命じたものである。是什麼人であるか。看よ當軒大坐して

大徳四大色
身は無常

居るは。

諸大徳此の四大色身は假りに因縁和合した者で、畢竟無常なる者である。色身が無常であれば、五臓六腑、髪の毛、爪齒等には云ふまでもない、總て眞實ならざるものである。此の無常の中に於て唯諸法は是空相の中より流出したる者である。と見得し、識得する底のもの、此の者ばかりが眞實にして生死に染まざる底の者である。空相にして而も眞實なる者と云ふは、此の四大色身を離れて外に在る者ではない。汝が一念馳求の心の歇得ずる處、其の端的が即ち這箇である。其處を喚んで菩提樹とも云ひ、悟道とも云ひ、正覺とも云ふのである。さて又菩提樹を覺樹と云ひ、道樹とも云ふのは、三世の諸佛も此の樹下に於て正覺を得られ、歴代の祖師も此の樹下に於て成道を唱へし故である。樹と云つて別に木の在る

菩提樹

無明樹

のではない、只覺の境界を樹下と指すのである。又無明樹と云ふも同じこと、別に樹のあるのではない、汝が佛祖を賞讃して馳求の心を歇得すること能はざる處、其處を喚んで無明樹と云ふのである。煩惱と云ひ、菩提と云ふも別に二つはない、只歇と不歇とに依て名づけられた者である。此の無明と云ふ者は元來何處と云ふ住處もなければ、去處もない、又何時始まりて、何時終ると云ふこともない、無始劫以前より盡未來際の末まで、種々様々に轉變して幻化の如き者である。諸人、若し念々相續して馳求の心を歇むることを得ざれば、便ち他の無明樹に上つて六道四生の中に入り、披毛戴角を免ることは出来ない。各能く用心すべき事である。終日他の無明樹に上つて是を樂と認めて居りはすまいか、始終甘い者を食ひたいと思つて居りはすまいか、不斷奇麗な者を

入六道四生
披毛戴角

著たいと思つて居りはすまいか、又酒色に耽つて居りはすまいか。汝若し是等念々馳求の心を歇得すれば便ち其處が清淨法身佛の境界である。若し一念も馳求の心が生じなければ、忽ち菩提の覺樹に上つて三界の中に神通變化し、意生化身し、法喜禪悅し、身光自照して自由自在である。

問ふ何をか意生化身と云ふ。曰く再來せんと欲すれば再來する之を意生化身と云ふ。再來には大に仔細あるが、本分を能く受用する所の境界である。彼の瀉山の水牯牛、仰山の首山念、雲門の雪竇顯等は皆是意生化身である。瀉山水牯牛の因縁は、各骨打て參得するがよい。紫野大德寺の開山大燈國師は雲門の再來と云ひ、永源の開山寂室和尚は弘法の再來と云はれて居る。再來と云へば遠い事であるが、即今觀音三十二應身の如く此の身を此處に置きながら自由に化身

意生化身

法喜禪悅

することも出来る。如何にすれば斯く自由に身を化することが出来るかとなれば、此の身光自照する底の者を以て、物來れば則ち照す、身を百億に化すると云ふも、此の受用底を云ふのである。雨に逢ふては雨と化し、風に逢ふては風と化し、月に逢ふては月と化し、花に逢ふては花と化し、佛に逢ふては佛と化し、祖に逢ふては祖と化する。身光自照の曖昧なる者は、是の如くに自由を辨することが出来ない。

問ふ何をか法喜禪悅と云ふ。曰く法喜禪悅とは、法華經の語であるが、多くは聞法を歡喜し、禪定を修することを悦ぶ、之を法喜禪悅と云つて居るが、之は皆教相家の説である。禪者の受用は斯様なものではない。悟徹得法の上の自由自在なる境界、即ち出役大虚裏一箇自由身で、如來の教に入らんと欲すれば如來の教に入り、祖師禪に入らんと欲すれば祖

師禪に入り、我が意の欲する所に従つて身心悦樂なるを法喜禪悦と云ふのである。

身光自照

問ふ何をか身光自照と云ふ。曰く讀んで字の如く、自身の光明を以て一切萬物を照す、之を身光自照と云ふのである。所謂本分である。此の身光自照を能く受用する所の大明眼の衲僧に於ては、衣を思へば羅綺千重、食を思へば百味具足する。然し千重の羅綺、百味の飲食が自然に涌出て來ると云ふとはないが、衲僧家の受用は自由三昧である。或時は一衣の紙子を以て羅綺千重と爲して用ひ、或時は千重の羅綺を以て紙子一衣と爲して用ひ、或時は一菜を以て百味の飲食と爲して用ひ、或時は百味の飲食を以て一菜と爲して用ひ、或時は丈六の金身を以て一莖草と爲して用ひ、或時は一莖草を以て丈六の金身と爲して用ひ、飢えては飯を喫し、困し

思衣羅綺千重
思食百味具足

更無橫病

來れば臥す。是の如く自己本來の面目に於ては無病健全であるが故に更に不足はない。不足と云ふことは此の色相の上にも有ること、例令は耳病に罹りて耳の聞えざるは、之を耳門の不足と云ひ、眼病に罹りて眼の見えざるは、之を眼界の不足と云ひ、脚氣に罹りて足の不脱洒なは、之を足の不足と云ふのである。さて無明の無住處なることは、上に述べたるが如くであるが、菩提にも住處はない。若し菩提に住處あらば、菩提を得たと云ふ者も在るであらうが、菩提に住處なきが故に之を得たと云ふ者もない、本來無一物である。若し之を得たと云ふ者あらば、其は邪魔外道の種族である。

道流、汝等各大丈夫の漢を具して居る。天下の廣居に居り天下の大道を行き志を得ば、民と之に由り志を得ざれば、獨り其の道を行く富貴も淫す能はず、貧賤も移す能はず、威武

道流大丈夫
更疑箇什麼

も屈する能はず此之を大丈夫と謂ふとは孟子の言であるが、此の方の云ふ所の大丈夫の漢とは、這箇本分に對しては、天堂地獄も、劍樹刀山も、鑊湯爐炭も、銀山鐵壁も、天魔波旬も、一々皆敵對することが出來ない、乃至乾坤倒覆すとも更に疑ふこともなく、十方の諸佛現前すとも一念心の喜ぶこともなく、三途地獄頓に現ずとも一念心の怖るゝこともない、之を大丈夫の漢と云ふのである。是の如き大丈夫の漢を具して居れば、諸人更に疑ふべきことはない。併し疑つても差支はない、大疑の下には大悟あり」と古人も云つて居る、疑來り、疑去り、盡大地只一枚の疑團と成るときは、大悟は疑ひない。諸人、各大丈夫の漢を具して居ると云つても、未だ疑念が晴ないであらうが、即今目前、著衣喫飯、行住坐臥の上に於て用を辨ずる底のもの、是を誰と思つて居るであらう。是即ち

古人云心隨萬境轉

大丈夫の漢の應現である。此の者を把得して受用せんければならない。然し把得して受用せよと云へば、何か色相でもあつて、手を以て把へ得らるゝ者の如くに思ふ者もあるであらうが、此の者は決して色相に預るものではない。之を號して諸佛の玄旨と云ふのである。斯様に見得するときは、頭々物々嫌ふ底の法はない。彼の西天の第二十二祖摩拏羅尊者の偈にも、心隨萬境轉、轉處實能幽、隨流認得性、無喜亦無憂と云ふてある、心と云ふ者は目前の萬境に隨つて轉する者である、其の轉ずる所のものは什麼物ぞと眼を著くれども、元來無相なる者であるから見ることは出來ない、實に幽玄不可思議なる者である。流とは萬流で、萬法と同一義である。能く萬法に隨つて一心の生ずる處の、其の落居を見届得るならば、喜と云ふこともなければ、憂と云ふこともない。其の

喜憂なき處が、自己本具の天真佛である。此處を指して直指人心見性成佛とも云ふのである。

道流如禪宗
見解死活循
然

道流、我が禪宗の見解と云つて、別に仔細はない、只死中に活を得、活中に死を得、死活循環として生死自由を得るにある。佛四十九年の説法、祖師一千七百則の公案も、諸人をして生死自由を得しめんが爲めの方便である。生死自由と云つても、生れたければ何時でも生れ、死にたければ何時でも死ぬると云ふことではない、月と見し心が其の月を去つて直に花に遷る、是を生死自由と云ふのである。寔に最易いことではあれど、皆是執著の念の強い爲めに轉々地に轉ずることが出来ない。是の自由を得たいと思へば、彼の金剛經の「應無所住而生其心」に參ずるがよい。又句にも死句と活句の別がある。義理に拘泥したのを死句と云ひ、義理に拘らざる

如主客相見
便有言論往
來

或全體作用

を活句と云ふのである。生死自由を得んと欲すれば、死句に參ず可からず、活句に參す可しだ。彼の趙州問、投子大死底人却活時如何、投子云、不許夜行、投明須到と云ふが如きは活句である。即ち生死自由底である。故に參學の人は骨折て微細に詮索しなければならぬ。假令一則の公案を調べるにしても胡椒丸吞ては何の役にも立たない。さて師學共に生死自由を得たる所の作家の相見は、學者が問へば、師家が答へ、師家が問へば、學者が答へ、互に言論往來して寔に見事な事である。其の際明眼の師家が學者の問頭に隨つて能く其の機宜に應じて酬答することは、誓へば月の萬水に沈み、鏡の萬像を現はす如く、何の造作もなく自由自在に答へる。或は自己屋裏の那一人の全體を學者の面前に拋出して見せることもある。或は機權を把つて怒を呈し、喜を呈し、種々様々

なる手段を以て接得することもある。或は又身を藏して影を露し、表面黄金の交を結ぶ體を爲し、裏面には砒礪の如き毒々しい機を含んで學者を認むることもある。總て衲僧家は喜べる色有つても喜ぶでもない、怒れる氣色有つても怒るでもない。誓へば月は本と圓滿なる者であれど、時に随つて盈虚あるが如く、全體を現すことなくして半身を現すこともある。是は衲僧家の受用のみには限らない、在家の人の平生底にも此の半身底の用が最必要である。彼の蛤の如く口を愕と打開けて、其の全體を現はさば、我が内證を見透され、思はぬ耻をかくのである。故に此の半身底を用ひて居れば、一生無事に世を渡ることが出来る。或は又大活明眼の衲僧に於ては、縦ひ文殊普賢の如き伶俐俊發の學者が出て來ても、亦文殊普賢が直に出頭し來るとも、直に捉へて之に打

或現半身

或乘獅子
或乘象王

乗り、我が爲さんと欲する儘に接得するのである。

さて真正見解の學人の如きは、師家の面前へ出て來るや否や、便ち

喝と

一箇膠盆子

一喝を下して、先づ一箇の膠盆子を拈出して師家の邪正如何を驗みる。此の膠盆子に足を踏込んだが最後、三進とも三進とも動きは取れない。然るに此の師家は無眼子であるから學者の來問は境であることを勘辨せずして、却て他の問頭に随つて模を作し、様を作し、出離得脱が出来ない。彼の自ら善知識であると思つて自を慢じて居る無眼子の働きは、皆是の如くて、明眼の衲僧とは、一問一答、一挨一拶の上に於て雲泥の差がある。昔し一僧あり池寺の白翁に問ふ、坐禪すれば睡眠を催す如何にすべきぞと、白翁云く、我知らず狗子

に問へ」と答へられたと云ふ。又紫野某和尚に參ぜし江島公貞と云ふ居士が在つた。此の公貞が豊前國細川越中守が許に在りしとき、或時家中の侍兩三人同道して野外散歩をせられた所が路傍に罪人許多張附に擧げられて在るを見て、彼の同伴の侍公貞に問ふて云く、「貴公は參禪の士で在るが定めて罪惡の因縁をも知つて居られるであらう彼の張附に擧げられたる罪人は如何なる宿業に依て此の如きか」と公貞云く「我知らず直に張附の柱に問取せよ」と答へられたと云ふ。此の公貞が無眼子であるならば、色々垂誨したり、種々の因縁話などするであらうが、具眼の者は俗漢たりと雖も大に異つた所がある。彼の師家が饒路に涉つて模を作し、様を作すが故に、學人便ち

喝と

此是荷言之
病不堪醫喚
作客看主

又一喝した。前箭は軽く、後箭は深し。今時斯の如き無眼子の師家が特に多い、學人に喝せられながら言句葛藤の膠盆子を放すことが出來ないで、色々高慢らしいことを云つて居る。此は是漫性の結核患者である、如何なる明醫と雖も到底療治を施す可き術がない。之を喚んで客主を看るとなす。

或は師家が明眼で有れば、學人未だ一言一句、一機一境拈出せざる已前に向つて、其の學者の機を鑑み、問ふ者の好惡を知るのである。既に一言一句吐出すのを待つて後知るの、は、遅八刻である。聲前に向つて辨得して天下の人の舌頭を坐斷するのでなければ、眞に明眼の宗匠とは云へない。特に學人一問を呈すれば、便ち其の間處を奪取して一棒一喝を行して打つて除ける。學者が無眼子であれば、師家に己れの間處を奪はれて周章狼狽し、疑惑を挾んで生涯放つこと能

此是主看客